第１０回雲南の地域医療を考える
シンポジウム開催報告集

平成２６年１２月
雲南地域医療を考える会

「第 10 回 雲南の地域医療を考えるシンポジウム」タイムスケジュール

時　　間	日程および内容
１２：３０	開　場（受付開始）
１３：００	開　演　開会　　総合司会　山本　啓子（雲南市立病院） 開会宣言　足立　昭二（雲南地域医療を考える会副会長） 開会挨拶　関　龍太郎（雲南地域医療を考える会会長） 来賓挨拶　原　　仁史 様（島根県知事代理、島根県健康福祉部長） 速水　雄一 様（雲南市長）
１３：２０	記念講演講師紹介　総合司会　山本　啓子 記念講演 演　題：「学び続けること」 講　師：池上　彰 氏（ジャーナリスト）
１４：２５	対談者紹介　総合司会　山本　啓子
１４：３０	記念対談 テーマ「少子・高齢化社会における医療と教育のあり方」 ○対談者 島根県健康福祉部長　原　　仁史 氏 島根大学学長　小林　祥泰 氏 雲南市長　速水　雄一 氏 雲南市立病院事業管理者　松井　　譲 氏 ジャーナリスト　池上　　彰 氏 ○進行役 雲南地域医療を考える会会長　関　龍太郎
１５：５５	対談終了
１６：００	閉会挨拶　野津　慎次（連合島根雲南地区会議議長）
１６：０５	閉会　総合司会　山本　啓子

第１０回雲南の地域医療を考えるシンポジウム開催報告

平成２６年１１月１６日（日）、木次経済文化会館チェリヴァホールにおいて「第１０回雲南の地域医療を考えるシンポジウムを開催しましたので、その内容を報告します。今回は第１０回の記念開催ということで、記念講演の講師として本会の関会長と親交のあるジャーナリストの池上彰氏をお招きし、「学び続けること」と題した講演をいただきました。講演では、アウトプットを意識したインプットが大事という事や、日々学び続けることの大切さなどを学ばせていただきました。その後、島根県健康福祉部・原仁史部長、島根大学・小林祥泰学長、雲南市・速水雄一市長、雲南市立病院・松井譲事業管理者による「少子・高齢化社会における医療と教育のあり方」をテーマとした記念対談を行いました。対談では、少子高齢化、医師不足の現状の中で地域医療と教育をどのように形作るべきかなどについて、白熱した議論が交わされました。

当日は、約５００名もの皆様にご来場いただき、大変成功裏に開催することが出来ましたことに感謝するとともに、今後も継続して開催し、今回ご出演いただきました関係機関の皆様からご助言をいただきながら、「地域医療を継続して守っていく仕組み」を作っていきたいと思います。

第１部　記念講演

講師：池上　彰 氏（ジャーナリスト）

演題：「学び続けること」

【池上氏】皆さん、こんにちは。御紹介いただきました池上です。

何でここへ来ているかというと、この雲南地域医療を考える会の会長、関会長と私が松江時代に知り合いまして、今回、こういうものをやるから来いと命令を受けまして、快くも何も、命令を受けたんで来たということでございます。で、この１１月１６日だよということになっていたんですが、ことしの夏ぐらいにどうも政局がおかしくなって、１１月１６日が選挙の投票日になる可能性があると。どうも安倍さん、解散総選挙をやりたがっているよという話があり、１１月１６日の日曜日にやるかもしれませんと。毎回、選挙の開票の当日は、東京のテレビ局で開票特番をやっておるもんですから、お願いしますよと言われて、いやいや、１１月１６日は島根県に行く予定があるんだと。そうしたら、担当者が真っ青になって、何時に終わるんですかと。いやいや、とりあえず４時ぐらいかな。じゃあ、ヘリコプター出しますと。いや、ヘリコプター出しても、ヘリコプターで東京まで、うんと時間かかるよと。じゃあ、雲南から出雲までヘリコプターを出して、出雲からはもう少し早い便で東京に戻っていけば、とりあえず８時からの選挙特番に間に合いますのでお願いしますと言われ、恐る恐

るこちらの事務局に、解散総選挙になったら途中で抜けるかもしれないのでよろしくと申し上げていたんですが、無事にきょうの日を迎えることができました。ということですが、今週、ついに解散になりますね。来月、１２月１４日が投票ということになりました。本当は１２月の１０日ぐらいにイラクに取材に行くことになっていたんですが、イラクを取材して戻ってこられるかどうかわからないので、イラク取材はとりあえずキャンセルをして、選挙の特番に備えろということになってしまったということであります。

先ほど御紹介ありましたけれども、私、昭和４８年から５１年まで、１９７３年から７６年までＮＨＫの松江放送局に勤務しておりました。そこで、関先生とも知り合ったんですが、関先生と知り合っただけではなくて、松江で働いている女性と知り合って、知り合ってしまったというか、つかまってしまったというか、石見地区の、今は浜田市になりましたけど、昔は村だったんですが、そこから松江に出て働いていた看護師と知り合うことに、知り合ったというよりつかまってしまって、で、出ることになりまして、今から考えれば、島根県の医療関係者が決して多くはないのに、１人連れ出してしまったと責任を感じており、県の人口減少に拍車をかけたかなとこう思ってるんですが、その罪滅ぼしもあって、今日ここへ来たということがあります。そして、この後、皆さん方とその医療問題ですね、いわゆるこの中山間地での医療をめぐる問題、実にいろんなことがあるわけですね。これは一雲南、あるいは島根だけの問題ではない、全国に問題があるわけですね。そんなことも後ほど考えていければと思っておりますが、今日の私のテーマはそれではなくて、この「学び続けること」ということであります。これまで、ＮＨＫの週間こどもニュースを通じて、どのようにすればみんなに世の中の出来事をわかりやすく伝えることができるんだろうか、常に考え、常に勉強をせざるを得なかったということがあります。学ぶことの意味という、まあそんな話ができればなと思っております。

今、御紹介いただきましたように、１９９４年から２００５年までＮＨＫの週間こどもニュースのお父さん役というのをやってました。１１年間ですね。このこどもニュースをやってたころに、皆さんからよく聞かれた質問というのが２つありまして、１つは、あの放送、いつ収録してるんですかって質問なんですね。土曜日の夕方６時１０分からの放送でしたが、ああ、あれはね、生放送なんですよと言いますと、それは大変ですね、で、いつ収録してるんですって言われましてね。言ってるでしょうってなもんですけどね、人間というのは、思い込んでるとなかなか誤解が解けないということがあります。全くの生放送でやっていたんですね。

ごらんになった方はおわかりいただけると思うんですが、あそこにはお父さんとお母さんと、そして小学校、中学校の子供たちがいました。子供向けのニュース番組なんですが、ニュースですからね、これ、生放送でやるしかないんですね。で、これが例えば、出演者が大人ですと、打ち合わせにない突然の質問なんかしたら、お父さん、困るだろうから、そういうのやめておこうとか、生放送ですから、そろそろ終わりの時間が近づいてきたな、じゃあ、これで新しい話はもうやめような、と大人なら配慮してくれるんですが、子供は全くそういう配慮はないですからね。さあ、そろそろまとめに入ろうっていうときに限って、いきなりあのさあとかなんか始まるわけですね。ああ、来るぞ来るぞ来るぞってなもんでありまして、

一体どんな質問が飛び出してくるか全くわからないという、まことにスリルとサスペンスに満ちあふれた番組だということですね。今もいろんな民放に出て、特に芸能人とかタレントさんからのいきなりの質問に答えるという番組やっているんですが、それができるのも、あのとき、この１１年間、こどもニュースの子供たちによって私が育てられたからなんだなとこう思っているんですね。

そして、もう一つ、よく聞かれた質問というのが、池上さん、土曜日の夕方、画面に出てますけど、ほかの日、何してるんですか。ああ、ほかの日はね、遊んでるんですよって言いましたらね、それはうらやましい御商売ですねって、全く冗談が通用しなかったということがありますね。世の中にそんな楽な仕事あるわけないですね。それ、多分ね、私がアナウンサーだと勘違いされてらっしゃるのかなと思うんですね。アナウンサーはいろんな番組に出てきますでしょう。あるいは毎日画面に出てきますよね。その点、池上は土曜日の夕方しか出てこない。ほかの日、何やってるんだろうとこういう疑問だろうと思うんですね。私、テレビの画面に出てましたけど、今も出てますけど、アナウンサーだったことは一度もないんですね。ＮＨＫに記者で入りまして、３２年間ずっと記者の仕事をしていました。ＮＨＫの記者って何してるのか。基本的に新聞記者と全く同じなんですよね。現場に行って取材をし、アナウンサーが読む原稿を書くという裏方の仕事、これが記者なんですね。ですから、私が松江にいたときも、最初の２年間は松江警察署と島根県警察本部と松江地方裁判所、広島高等裁判所松江支部、それから松江地方検察庁、広島高等検察庁松江支部、これを担当していたんですね。警察の中をぐるぐるぐるぐる回り、あるいは検察庁を回り、裁判所を回りということをやり、３年目になりますと、今度は松江市役所の担当をしながら、県庁もカバーをし、あるいは日銀松江支店を取材するというようなことをやっていたんですね。で、その後、広島県の呉通信部というところに行きまして、その後、東京の報道局社会部であります。なぜか警視庁の担当になりまして、捜査一課、捜査三課ですね。殺人、強盗、放火、誘拐の専門記者ということになりました。島根県にいるときは本当に平和ですから、殺人事件なんていうのはほとんどなかったんですけども、東京に行きますと毎日のようにあるわけですね。そのたびごとに現場に取材に行くという、なぜかそういう仕事をやるようになり、その後は、今度は文部省、現在の文部科学省ですが、そちらに移って、教育改革について取材をするなどということをいろいろなことやっていたら、昭和の終わりになりまして、昭和天皇が病気で倒れられるということがありました。あのときは竹下総理大臣の時代でしたね。宮内庁に応援に行けということになりまして、３カ月間宮内庁詰めになりました。皆さん、覚えてらっしゃいますか。昭和の終わりぐらいにね、宮内庁から朝の６時、７時、あるいは１０時、お昼に、宮内庁です、今日の天皇陛下の御容体は、今日も下血がありましたってリポートやってたでしょう。ねえ、あれが私だったんですね。そんなことをやっておりまして、平成になりましてから、首都圏のニュースのキャスターをし、それから、こどもニュースを担当することになったというわけなんですね。

では、こどもニュースでは何してたのかといいますと、さあ、毎週毎週、どのニュースを取り上げようか。取り上げるニュースの項目を選び、それを子供にわかるように書き直し、そして、わかるような模型をつくらなければいけませんね。どんな模型をつくるか、模型の

アイデアも実は私が考えなければいけなかったんですね。そうやって、つまり私の本業は、こどもニュースをつくる裏方の仕事だったんです。土曜日の夕方、ついでに画面に出てたんだとこうお考えいただければいいと思うんですがね。

これ、１１年間やってたんですけど、この間に奥さんが４人かわりましてね。次々に奥さんがかわったということがあります。何で奥さんが次々にかわったのか。これね、何も私が、今の奥さん飽きてきたから、そろそろ次の人になんて言ったわけではないんですね。こどもニュースですから、当然のことながら、子供向けですから、番組にも小学生や中学生の子供たちが出ているわけですが、生身の子供っていうのは成長早いわけですね。あっという間に高校生、大学生になっちゃいますと、こどもニュースの子供役としてふさわしくないということになるわけですね。そこで２年ないし３年で子供たちが交代をする、新しい子供たちが入ってくる、それに合わせて家族が全部新しくなって、お母さんも新しくなると、こういうことなんですね。最初に、ですから、私以外の家族がみんな変わったときは結構話題になりまして、池上がそれまでの妻子を捨てて、新しい妻で逃げたなんて言われたんですが、その最初に捨てたという、その初代のお母さん役が柴田理恵さんでありまして、今でこそ柴田理恵さん、大変有名なんですけど、実は１９９４年、こどもニュースに彼女が出て、彼女のテレビのレギュラー番組はこどもニュースが初めてだったんですね。テレビに出たころは、皆さん、あのおばさん、誰ってこういう反応だったんですね。それが見る見る有名になっていったということがあります。何で柴田さんがこどもニュースの初代のお母さん役に選ばれたのかといいますと、私がこどもニュースのお父さん役をやれと言われたんですね。これ、よくまた何でこどもニュースのお父さん役やることになったんですかってよく聞かれるんですが、話は簡単ですよね。ある日、突然上司に呼ばれて、４月からやれと言われただけ。簡単に言えば、業務命令だったからですとしか言いようがないわけですが、このときにスタッフがお母さん役候補を探してまして、候補を２人に絞り込んでいたんですね。で、おい、池上、これから夫婦になるんだから、どっちがいいかお見合いして決めろと言われまして、お見合いさせられたんですね。１人は民放でリポーターをしていた大変きれいな方と柴田理恵さんとですね、お見合いをさせられましてね。で、あの柴田さんの迫力に圧倒されちゃったんですね。何て生活感にあふれた人だろうか。いや、こりゃいいやということで柴田さんになったということなんですね。今でも時々、いろんな民放の番組で御一緒することがあるんですが、そうすると、その柴田さんのマネジャーが私のほうを指さして、ほかのタレントさんにね、あの人、柴田さんの元彼よって言うんですね。どうもえらい誤解を招くような発言だなあと思うんですが、そういう形でこどもニュースというのをやってきたんですね。

こどもニュースの視聴率というのが、土曜日の夕方６時台、当時で年間を通じて番組全体の視聴率は１０％ぐらいだったんですね。全局の中でトップでした。番組全体の平均は１０％だったんですが、年齢別視聴率調査というのがありまして、それを見ますと、６０歳以上の男女に限って見ますと、視聴率が２０％を超えておりまして、人呼んで週間老人ニュースとこう言われたんですね。今ここにいる方、こどもニュースといってうんうんとうなずいている御高齢の方が大勢いらっしゃいますが、そういう方が多く見られていたということなんですね。

そういうことをやっていたんですが、私、そもそも記者なもんですから、テレビに出ているよりは原稿を書いてたほうがずっと楽しいという思いがありまして、ニュースについての本を書きませんかという話をいただいて書いてるうちに、こっちのほうがずっと楽しいということに気がつきまして、本を書くことに専念するためにはテレビをやめたほうがいいだろうと考えて、２０１１年の３月をもってテレビのレギュラー番組はみんなやめますよという宣言をし、その後は心行くまで自分で取材をし、原稿を書くという仕事をやろうと思っていたら、あっ、ごめんなさい、話が違いますな。ＮＨＫをだから２００５年にやめてですね、その後、ずっと自分でいろんな現場に行って取材し、本を書く仕事をやるようになったんですね。２００５年でそうなったんですが、ＮＨＫをやめてみてびっくりしたんですが、民放の人たちがみんなこどもニュースを見ていて、あのこどもニュースのようにわかりやすいニュースの解説をしてくださいという話がいっぱい来まして、それを最初のうち、はいはい、いいですよと受けているうちに、ふと気がついたら、またいっぱいテレビの仕事やってることになりまして、あれ、何のためにＮＨＫやめたんだっけということに気がついて、２０１１年の３月をもってテレビのレギュラー番組はみんなやめますよと宣言をしたら、２０１１年３月１１日、東日本大震災が起きてしまって、ここでやめるわけにはいかなくなっちゃったという状態が実は続いてきたということがあります。

そして、その東日本大震災のときに、とにかく原子力発電所の事故が起きたわけですね。島根県にももちろん原子力発電所あるわけですが。あのときに、福島の原子力発電所の事故が起きたときに、多くの方が非常に不安になったわけですね。一体、どうなるかわからない。特に、東京の場合、東京、福島からあんなに離れている東京でも西日本のほうに逃げ出す人が結構いました。本当に不安になっていたわけですね。一体どうなんだろうかと思って、多くの方がテレビの前に座ったはずですね。テレビをつけた、そうすると、そこに専門家の人たちが出てきます。東京大学工学部とか東京工業大学工学部の先生たちが出てきて、で、こう解説をするんですね。ところが、これが専門用語がいっぱい飛び出してきて、何が何だかわからないんですね。皆さん、覚えてらっしゃいます。あのとき、突然、ベクレルとかシーベルトっていう放射線の単位が出てきたでしょう。初めて聞くという方、多かったと思うんですね。昔、私が習ったころは、放射線の単位はキュリーでしたね。何とかマイクロキュリーなんて言ってました。それ、キュリー夫人のキュリーからとったんですが、その後、専門家の人たちが、放射線と一口に言っても、放射性物質から出る放射線の量の単位と、人体に放射線が与える影響の単位というのは、これ分けて考えたほうがいいだろうということになりまして、それぞれの放射性物質が出る放射線の量、これはベクレルであらわし、一方、人体が浴びる放射線、つまり人間の健康に影響があるかどうかという単位については、シーベルトという単位にしようということで、専門家たちがこれを分けたんですね。

ところが、専門家たちだけでそれをやってたもんですから、そういうふうに変わったってことを多くの一般の人たちが知らなかったわけですね。いきなりベクレル、あるいはシーベルトという単位が出てきました。専門家の人たちはいつも使っている言葉ですから、何の疑問もなく使うわけですね。で、自分たちがいつも使ってるもんですから、テレビを見ているみんなもこれぐらいわかるだろうと勝手に思い込んでるんですね。でも、テレビ見ている人

たち、初めて聞く話ですから、何のことかわからない、こういう事態になりました。

そうすると、人間って不思議なもので、これが例えば、この原発事故の結果、こういう危険性がありますとか、これに関しては諦めてくださいとか、そういうことを言われれば何とか、何といいますかね、心の整理もつくんですね。あるいは諦めがつくという部分があるんですが、説明がわからないと、どうしていいかわからないわけですね。何が何だかわからない。これ、人間にとってはこれが一番不安なんですね。結局、そういう事態になってしまいました。みんなが専門家の話を聞いているうちに、ますます不安が募ってしまうという事態になったんですね。

私はテレビを見ていて、ああ、これじゃいけないなあと思いました。つまり、専門家の人たちは、専門家の非常に視野が狭くて、多くの人が何がわからないかということがわからない。一方で、その説明を聞いてる側は聞いてる側で、何か理科系の数字が出てくると、もうそれだけで拒絶反応、確率何％なんて言っただけでもじんま疹が出そうという文科系の人たちが大勢いる。ああ、日本という社会は文科系と理科系がはっきり分かれてしまっている。これ、決していいことじゃない。もっと理科系の専門家の人は、もっと一般の人たちが何がわからないかということがやっぱりわかるべきですし、あるいは、文科系であっても一応、基礎的な理科系の人たちの考え方、こういうものをやっぱり理解できる、そういう文理融合といいますか、そういうことが必要だなあと思っていたら、突然、東京工業大学の先生たちがやってきて、東京工業大学で学生に教えてくれませんかということになりました。

東京工業大学というのは、本当に理科系の偏差値エリートですね。本当に極めて優秀な学生なんですけど、とりわけ数学とか物理とか化学とか、そっちについてはもう天才的なぐらいにレベルが高いですが、国語や社会がちょっと苦手。国語や社会がちょっと苦手なもんだから、東京大学を諦めて、東京工業大学にしたっていう人たちなんですね。どうも世の中のことをなかなかよくわからない。数学や物理のことなら任せてくれなんですね。彼ら、日常、数学で会話をしてますからね。そういう人たちにもっとコミュニケーション能力をつけさせてほしい、あるいは視野を広げさせてほしい、そういう話をしてほしい、だから、先生になってくれとこういう話がありまして、そうか、あの原発事故のときに専門家があのような、みんなが何がわからないかわからない、ああいうコミュニケーション能力が欠けている、あれではいけないんだろう。これからの日本のことを考えたときに、専門家であってもきちんとしたコミュニケーション能力、あるいは世の中の仕組み、社会に対する関心、そういうものを身につけてもらう必要があるんだなあということで、それじゃお受けしましょうということになり、今はその東京工業大学で理科系の学生たちに、世の中の仕組みですとか、あるいは戦後の日本、あるいは世界の現代史、そういうものを教えるようになったとこういうことなんですね。で、経済学なども教えるようになりました。

私もそもそも大学では経済学部で、経済学をちょっとはやったんですけど、まあ、今の学生と違って当時の大学生というのは本当に勉強しませんでしたから、ほとんど勉強しないまま卒業したという非常にじくじたる思いがありまして、後ろめたい思いがあり、大学を出た後、社会に出てからもそれなりに実は勉強していたということがあるんですね。

さあ、どういうときに勉強していたのかということなんですが、先ほど申し上げましたよ

うに、警視庁で捜査一課、捜査三課を回っていたということがありますね。皆さん方、よく例えばテレビのニュースなどで、警視庁記者クラブからお伝えしましたなんてリポートをする記者がいます。一体、日ごろどういう取材活動をしているかということは、おそらく多くの方が御存じないんだろうと思うんですね。一体、どんな仕事ぶりなのか。今の流行語で言うと、ブラック企業そのものなんですね。

どういうことかといいますと、東京の場合、当然、殺人事件が結構起きますよね。そうすると、捜査本部ができます。そうすると、捜査本部詰めになった捜査員の人たち、昼間はひたすら犯人を追い求めて聞き込み捜査に歩いているわけですね。ですから、取材することができません。で、その捜査員の人たち、ずっと足を棒にして歩き回り、聞き込みをした結果、大体、夜の８時ぐらいに捜査本部に戻ってきて、捜査会議を開くんですね。そこで、それまでの聞き込みの内容をみんな報告し合い、明日以降の捜査方針を決めて、夜１０時ぐらいにとりあえず解散ということになります。

さあ、それから捜査員の人たち、ちょっと軽くお酒を入れて家に帰るということになるんですが、島根県と違って、東京の場合、なかなか都心に家を持つことができないんですね。警視庁のお巡りさんって真面目なもんですから、若くしてマイホームを持つんですが、警視庁の警察官であっても東京都内に家を持てる人はほとんどいないんですね。埼玉県の春日部とか千葉県の我孫子とか神奈川県の相模原とか、大体、電車に乗って１時間半から２時間かかる、そこに帰るわけですね。大体、そこに終電車で帰ってくるわけですね。そこで、待ち構えているんですね。つまり、家に帰ってくるところをつかまえないと話を聞くことはできないわけです。ですから、春日部とか我孫子あたりで、午前０時半とか午前１時ぐらいまでそこでずっと待ってるんですね。捜査員が帰ってくるのを待ってます。

ところが、これが家の前で待ってるわけにいかないんですよ。どうしてかといいますと、ほかにもライバルの新聞社がいっぱいあるわけですね。そうしますと、家の前で待ってたりすると、ほかのライバルの新聞記者にそれが見つかると、あ、池上はあの捜査員の家に話を聞きに行ってるのか、よし、情報源を潰してしまおうって上司に密告する新聞記者がいるんですね。あそこの捜査員の家には池上が来てますよと。あの捜査員、情報漏らしてるかもしれませんよ、などと告げ口をして、その捜査員を転勤させてしまおうという、そういうたちの悪い新聞記者がいるんですね。どこの新聞記者とは言いませんけど、Ｙ新聞とかＳ新聞とかいうところがですね。ああ、この場合のＳって山陰中央のＳじゃないですよ。大丈夫、念のため言っておきますけどね。全国紙のほうのＳですけどね、などはそういうことをやるんですね。

ですから、家の前に待ってるわけにはいかない。離れたところで隠れて待つわけですね。要するに、その捜査員の家が見通せる、かなり離れた場所の住宅街の電柱の陰に隠れて、こう待っているわけですね。よく考えてください。夜の１２時とかね、１時ぐらいに住宅街で若い男が一人、電柱の陰にぼうっと立ってたら、御近所、ひとり暮らしの女性がいたらどうですか。怖いでしょう。普通どうします。そういうときは１１０番かけますよね。パトカーがやってくるわけですね。突然、パトカーがやってきて、警察官がばらばらっとおりて、君、こんなとこで何やってるんだ、とこう職務質問というのを受けるわけですね。いや、そこで

ね、捜査員が帰ってくるの待ってるんですよ、なんて言おうものなら、そのパトカーの乗務員を通じて上司に情報が行ってしまうかもしれない。捜査員に迷惑がかかりますから、いやあ、友達が帰ってくるの待ってるんですよなどと言って言い逃れをするわけですね。ということを実は毎晩毎晩やってるんですね。１年３６５日のうち、３６０日ぐらい、それを繰り返しております。休みというものはそもそも存在しないんですね。

大体、でも捜査員が帰ってきたって、みんな、くたびれ果てているわけでしょう。そして、当然、警察官としての守秘義務がありますから、ぺらぺらしゃべってくれる人なんかいるわけないわけですよね。結局、軽くあしらわれておしまい。それから、家に帰ると午前２時、風呂に入って寝ると午前３時、午前５時になると電話がかかってくるんですね。それぞれのところに、新聞社にしてもテレビ局にしても当直、徹夜で泊まり勤務をしている者がいるわけですね。午前５時になりますと朝刊が配達されますから、それをこう見ると、そもそも池上が担当している警視庁捜査一課で、ＮＨＫが知らない記事が出ていたりすることがあるわけですね。どっかの新聞社の特ダネというのが出ていると、すぐ追いかけろと言うわけですね。午前５時に電話かかってくるわけです。こういう話で抜かれてるぞ、すぐ追いかけろ、７時のニュースに入れろって言われたってね、午前５時に電話かかってきて、すぐに入れろって言ったって、新聞に出てることが本当かどうかわかんないでしょう。新聞もよく誤報を書きますからね。

当然のことながら、これはこちらとして確認をしなければ原稿が書けないわけですよね。そのためには、捜査員の家に電話をしなければいけない。午前５時に電話をかけるわけにいきませんから、受話器を握り締めたまま待つわけですね。朝の６時半ぐらいまで待つわけですね。で、それから電話をかけます。恐る恐る、朝早く済みません、ＮＨＫの池上ですがって言うと、電話の向こうで、不機嫌そうな声でああっとか何か言って電話に出てきて、池上ですがって言った途端、何時だと思ってんだ、ばかやろう、がっちゃあんと電話を切られておしまいということになるわけですね、という繰り返しですね。これはもちろん毎日というわけではありませんが、しょっちゅうこういう目に遭うわけですね。というふうに考えると、ブラック企業だという意味がおわかりいただけるでしょう。

今もみんな、それをやっているんですね。３６５日のうち３６０日はそれをやってる。５日間ほどはやらないんですね。いつやらないのか。夏と冬のボーナスが出た日、この日に捜査員の家に行くと、本当に嫌がられますから。あとはクリスマスイブと、それから大みそかと元日ぐらいですね。さすがにここは行かないんですが、あとはもうせっせせっせと行くということになります。

そして、捜査員が何時に帰ってくるかわかんないわけですよね。だから、念のため、夜の９時か１０時ぐらいからずっと待っていることになります。余りに時間がもったいないと考えるようになりまして、何とかこの時間を潰すことがないだろうかというふうに考えて、そ

うだ、そういえば、ＮＨＫにはラジオ英会話という大変すぐれた英語番組があるということに気がついて、ＮＨＫの英語の会話のテキストってもう１５０円ぐらい、非常に安いものですから、それを毎月買ってくるわけですよね。とりあえず、それこそ自動販売機の明かり、あるいは街灯があるところに行って、そのテキストを開いて、英語の文章を１つずつ覚えるんですね。こう一つ一つ声に出して覚える。で、その後はテキストを閉じて、今度は住宅街の暗いところを歩きながら、行ったり来たりしながら、ぶつぶつぶつぶつと英語の文章を暗唱する、これによって英文を覚えるというやり方をとりました。はたから見ると、相当怪しいですよね。若い男が暗いところを行ったり来たり、ぶつぶつぶつぶつ何か言ってる。本当にまた１１０番かけられてしまうということなんですが、結局、これ何もね、何か自分が英語を身につけて、将来、何か海外で仕事をしようとか、そういう思いだったわけじゃないんですね。単に、何かただ立ってるだけ、ただ３時間、電柱の陰に隠れて待ってるのももったいないなあ、何かできないかなというところで、たまたま英語をやるようになったんですね。その結果、今、大体、毎年海外に１５回ほど海外取材に行くんですけど、決して流暢な英語はしゃべれませんけど、とりあえず英語で仕事ができているのは、ああ、あのとき、ただ何か時間が無駄だなあ、もったいないなあと思って勉強していたこと、それが今につながっているんだなあということですね。

これは、それでも住宅街の暗いところだとこれなんですが、場合によっては、明るいところで待つことができることがあるんですね。そういうときには、その経済学の本を引っ張り出してきて、これを勉強したっていうことがあります。これもその経済学の勉強をしていれば、将来、何かに役に立つだろうなんて何にも考えてなかったんですね。大学時代、まともに勉強してなかったから、改めて社会に出てからちゃんとした勉強をし直そう。あるいは、学生時代って、この勉強がどんな意味があるかって結構わかんないんですね。社会に出て初めていろんなことを自分が知らないっていうことに気がつきます。あるいは、経済学の話でいえば、世の中の経済がどのように動いているのかという仕組み、社会に出て働くようになって初めて気がつくんですね。そうなると、じゃあ、学生時代とは違って、今の世の中がどういう仕組みになっているのかをやっぱり把握したいという、こういう思いがあって、経済学の勉強を進めることができたということですね。学生時代はやっぱりなかなか勉強する気になれなかった。社会に出たほうが、なぜそれが必要なのかということがわかって勉強になるということなんですね。

例えば、皆さん方も昔、学校で世界史やったはずですね。最近は世界史、必修ということになってますけど、私はやっぱり高校のとき、世界史をやらされたんですけど、本当につまんなかったんですね。何かね、単語がいっぱい出てきて、年号が出てきて、カタカナがいっぱい出てきて、これが何の意味があるのかと本当につまらなかったんですね。ところが、今になってみると、世界史を知っていればいろんなことがよくわかるということが、それこそわかるようになりました。

例えば、最近、イスラム国というのが出てきているでしょう。イラクからシリアにかけて、非常に広い範囲をイスラム国と宣言してますよね。そして、実に残虐な形で大勢の人たちを殺しています。あのイスラム国、ついに独自の通貨を発行したんですね。そして、独自のパ

スポートというのも発行し始めました。あそこはもう本当に新しい国になったんだぞ、とこういう言い方をしてるんですね。そして、そのリーダーは、カリフと名乗りました。カリフ制を復活させたとニュースになりました。さあ、カリフって、そういえば昔、世界史でやったなあって思い出します。全然思い出さないって顔がいますね。きょとんとしてる方と、ああ、そうそうって方いらっしゃるかもしれませんが、イスラム教も始めたムハンマド、ムハンマドという人、神様の声を聞いたと言って、それを周りの人たちに広めていった、これがイスラム教の始まりですよね。で、そのイスラム教のムハンマドが死んだ後、さあ、ムハンマドの後継者をどうしようかということになったわけですね。ムハンマド自身は後継者を指名していなかったもんですから、後継者をどうするかということになり、言ってみれば、ムハンマドの後継者というのでカリフという役職をつくって、代々カリフがイスラム教徒を束ねていく、イスラム教徒の指導者になる、こういう仕組みがずっと続いていた。これがオスマン帝国の時代まで続いていたんですね。ところが、第一次世界大戦でオスマン帝国が滅びてしまった後、このカリフ制度というのが廃止されました。で、オスマン帝国が小さなものになって、今のトルコという小さな国ですけど、その新しい近代のトルコになったときに、そのカリフ制度はやめたんですね。

今回、あのイスラム国は、そのカリフ制度を復活させたというふうに宣言しています。となると、カリフ制度って何だっけといえば、世界史の教科書をもう一度改めて見れば、ちゃんと出ているということになるわけですね。あるいは、つまりオスマン帝国が滅びた後、やめてしまったというのを復活させたということは、オスマン帝国を言ってみれば新たに復活させようという狙いがどこかにあるんだなということがわかるんですね。彼らが新しくつくった通貨の単位はディナールなんですね。ディナールというのは、オスマン帝国の時代に使われていた通貨の名前なんです。オスマン帝国を現代によみがえらそうとしているんだなということが見えてくるんですね。

そして、彼ら、もともと、何か突然出てきたっていうイメージがあるかもしれません。もともとはイラクの中にあった非常に小さな過激派だったんですね。皆さん、覚えてらっしゃいますかね。小泉政権の時代に自衛隊がイラクに派遣されましたよね。イラクのサマーワというところで活動していました。このときに日本人の若者、香田証生君という若者がイラクをどんなところか見に行ったら、過激派につかまっちゃったんですね。で、その過激派が日本政府に対して、自衛隊をイラクから撤退させろと、撤退させなければこの青年の命はないと、こうおどしたんですね。そのとき、小泉総理は、自衛隊は絶対イラクから撤退させないとこれをはねつけました。その直後に彼は殺されたんですが、首を切られるその映像をその過激派がネットに載せたんですね。その香田君が首を切られて殺される、その瞬間の映像というのがインターネットに出回ったという極めて衝撃的なことがありました。

その過激派、イラクの国内の小さな組織だったんですが、やがて、アラブの春が始まって、隣のシリアで内戦状態になりました。これをチャンスと見たその過激派が、それまではイラクのイスラム国と名乗っていたのを名前を変えまして、イラクとシリアのイスラム国という名前に変えて、今度はシリアに行ったんですね。で、シリアに行って何をしたのかといいますと、シリアじゃ内戦状態になっているアサド政権に対して、反政府勢力を応援しようとい

うので、サウジアラビアとか、あるいはカタールとか、そういうところから大量の資金、あるいは武器が反政府勢力に流れ込んでいたんですね。で、このイラクとシリアのイスラム国は何をやったかというと、その反政府勢力を攻撃して、その資金や武器を奪い取るというやり方をとりました。それによって大きく成長した彼らが、またイラクに戻ってきて、今度はイラク、シリアだけじゃない、もっと大きな国にするんだと言って、地域名を外して、イスラム国と名乗ったんですね。

そして、イスラム国を名乗った彼ら、イラクとシリアの国境線をまたいで新しい国をつくったそのとき彼らが叫んだのが、サイクスピコ体制の打破という言い方でした。サイクスピコ体制の打破を訴えていますということなんですが、さあ、サイクスピコ体制っていって、うんうんってうなずく方、どうもほとんどいらっしゃらないようでありますね。これも世界史で必ず出てくる話ですね。第１次世界大戦のときに、オスマン帝国をこう何とかやっつけようと考えたイギリス、あるいはフランスが、いろんな工作をするんですね。イギリスは、まずそのオスマン帝国の中にいるアラブ人たちが反乱を起こせば、オスマン帝国が弱体化するだろうと考えて、アラブ人たちに、もしオスマン帝国が滅びたら、アラブ人の国をつくってもいいからねというようにイギリスは働きかけるんですね。それによって、イギリスからスパイが送り込まれます。そのスパイがアラビアのロレンスですね。映画にもなりました。アラビアのロレンスが、イギリスのスパイとしてアラブに入り込んで、アラブでの反乱を計画するということがあるわけですね。その一方で、やっぱり戦争のためにはお金が必要だ。お金持ちのユダヤ人にお金を出してもらおうと考えたイギリスは、ユダヤ人に対しては、オスマン帝国が滅びたら、ユダヤ人の国をつくることを認めますよ、とまたユダヤ人にはユダヤ人にそういう都合のいいことを言ったんですね。その上で、実は、イギリスとフランスで、オスマン帝国が滅びたら、我々でこの土地を分け合おうぜという密約を結んでいました。これがサイクスピコ体制というものなんですね。

ですから、イラクとシリアの国境線、真っすぐな直線で描かれている部分があります。イギリスとフランスがその土地の事情に全くお構いなく、ここで山分けって線を引いたんですね。これがサイクスピコ協定による分割。ですから、サイクスピコ体制の打破というのは、イギリスやフランスが勝手に引いた自分たちのアラブ人の土地を取り戻そうという、こういう要求になるんですね。これはアラブの人たちの心を打つんですね。何であんな過激な連中があんなことやってるんだって思うかもしれませんが、彼らにとっては、イギリスとフランスが勝手にやった国境線、我々アラブの者が新しい国境線をつくるんだぞと言うと、これが心に響いちゃうんですね。だから、彼らはあれだけの支持を得ているということがあります。

で、それだけではないんですね。彼らは一見、もう無差別に人を殺しているように見えますが、実はそうではないんですね。彼らはイスラム教のスンニ派の過激派で、シーア派というイスラム教でももう一つの派があるんですが、シーア派は敵視しているんですね。だから、シーア派はとにかく皆殺しにしてしまおうというやり方をとります。あるいは、同じスンニ派であっても、自分たちの言うことを聞かない者は殺すんですね。ところが、自分たちの言うことを聞くのであれば、ユダヤ人もキリスト教徒も殺さないんですよ。あるいは、ユダヤ人やキリスト教徒にイスラム教徒になれって強制することもないんですね。何でそんなこと

をしないのか。これもオスマン帝国がやっていたことなんですね。オスマン帝国の時代、ユダヤ人もキリスト教徒もイスラム教徒も同じ神様を信じている人間である。同じ神様を信じているんだから、その連中を無理やり改宗させたり、殺す必要はない。人頭税という一人頭幾らという税金さえ納めれば、それぞれの信仰の自由を認めるということをオスマン帝国はやってたんですね。だからこそ、オスマン帝国というのは実に広大な帝国として領土を維持することができたんですね。ユダヤ教徒でもキリスト教徒でも逆らわなければ、そして税金を納めれば、そのまま認めてあげますよというやり方をとってます。ですから、非常に不思議なんですが、あのイスラム国、ものすごく大量にいろんな人を殺しているように見えるんですが、ユダヤ教徒とキリスト教徒で、逆らわずに税金を払ってくれる人たちに対しては、これをちゃんと保護しているんですね。そういうところがなかなか見えてこない。ところが、オスマン帝国、あるいはその後の第一次世界大戦という世界史を知っていれば、今のこのイスラム国っていうのがどんなものなのかなっていうことがわかるということなんですね。

ちなみに、イスラム国は、２０２０年までに西はスペインから、東はインド、インドネシアまでの広大な領土を獲得すると宣言をしています。どうしてか。つまり、かつて、イスラムの王国があった、イスラム王朝があったところを全部取り戻すというのが彼らの野望なんですね。そのジハード、聖戦という言葉があります。ジハード、聖戦というのは、聖なる戦いってつい日本では訳しちゃうもんですから、戦争だと勘違いしてしまう人がいるんですが、ジハードって何も戦争だけではないんですね。イスラム教徒としてのイスラムの教えを守ろうとする努力、これがジハードなんですね。

もともとジハードというのは努力という意味なんですね。ですから、例えば、イスラム教徒は１日に５回お祈りをしなければいけない。朝早く、日の出前に起き出してお祈りをしなければいけない。でも、朝、日の出前に起きるの眠いなあ、布団から出るの嫌だなあ、やめちゃおうかなってときに、いやいや、イスラムの教えを守らなければいけない。必死になって寝床から出てきて、お祈りをする。これもジハードになるんですね。あるいは、１年に１カ月間、ラマダンといって日の出から日の入りまで、食べたり飲んだりするのを控えなければいけないときがあるわけですが、このときも、おなかすいたなあ、喉渇いたなあ、食べちゃおうかな、水飲んじゃおうかな、いやいや、イスラムの教えを守らなければいけないってぐっと我慢をすること、これもジハードになるんですね。さらに言えば、イスラムの教えを守るってことは、イスラム教徒の土地を守る。イスラム教徒の土地が異教徒によって奪われたり、あるいは侵略されたりしたら、それに対しては戦う。これもジハードということになるんですね。

ですから、かつてイスラムの王朝があったところが一部、イスラム教徒のものではなくなっている。例えば、典型がスペインですよね。スペインでは、スペインはかつてイスラムの王朝に支配されていた時代がありますよね。このとき、イスラム教徒からキリスト教徒の土地を奪い返そうという運動がありましたでしょう。レコンキスタ、国土回復運動というのがあった。これも世界史の教科書に書いてあるんですけど。つまり、かつてイスラムの土地だったものがキリスト教徒にとられてしまった。ここを取り戻すのはジハードだと彼らは考えてるんですね。だから、西はスペインから、東はインド、インドネシアまでの広大な領土を

獲得するぞというのが彼らの主張になるということなんですね。

２０２０年って何か日本でイベントがありましたよね。東京オリンピックですよね。ここからは本当にブラックジョークになるんですが、２０２０年、イスラム国の選手代表が東京オリンピックに参加するかもしれないと。ここまで来ると、本当に単なるブラックジョークになってしまうわけですが、こういうふうに考えると、イスラム国、極めて残虐なことをやっているんですが、地元の人たちにそれなりの支持を受けている部分もあるんだよということですね。

現代のさまざまな出来事というのをちょっと前にさかのぼることによって、いろんなことが見えてくるということがあります。そして、今、私がそのイスラム教の話をいろいろしましたけど、何でこのイスラム教の話をこんなふうにできるようになったのかといいますと、もちろん昔は全然そんなことは知らなかったわけですが、２００１年９月１１日、アメリカ同時多発テロがありましたよね。あれがイスラム過激派がやったんだということになりました。さあ、こどもニュースでこれを解説しなければいけなくなりましてね。イスラム過激派とは何かということを解説するためには、その前に、そもそもイスラム教とは何かって話をしなければいけませんよね。イスラム教徒は、イスラム教とはどういう宗教なのか、そして、実はイスラム教徒、世界に今、ざっと１５億人いるんですが、１５億人の中でも多くの人はもちろん平和を望んでいるわけですよね。平和な宗教なんだけど、ごく一握りの過激派がいるんだよという説明をするわけですが、そのためにはそもそもイスラム教ってどんな宗教なのってことを解説せざるを得ないということになるわけですね。

そこで、しようがないですね。まずコーランを読んだんですね。ムハンマドが神様の声を伝えたというものです。岩波文庫にしますと、３分冊に分かれていますが、そのコーランを読むんですね。ところが、コーランは神様がムハンマドに伝えたという、その神の言葉がただ断片的に並んでいるだけなんですね。これ、ムハンマドが神様の声を聞いたと言って、周りの人にそれを伝えたとき、ムハンマドは読み書きができなかったんですね。周りもみんな読み書きができなかったもんですから、みんな一生懸命、その神様の言葉だっていうのを覚えたんですね。みんな、それをひたすら覚えてた。そうしたら、そのうちに覚えている人たちが次々に死んでしまう。このままでは覚えている人がいなくなる。神の言葉を伝える人がいなくなる。これはいけないというので、ムハンマドが亡くなってしばらくしてから、そのムハンマドが伝えた神の言葉を覚えていた人たちが、覚えていたことを紙に記した、これがコーランになるんですね。だから、とにかく神様の言葉が書いてあるだけなんですよ。いつ、どんなときに、そういう神様がそういう言葉を言ったのかが全然わからない。そこで、コーランだけを読んだだけではだめなんですね。どういうときにその神様の言葉がムハンマドに伝えられたのかということを全部、これを書き記した本があります。「ハディース」といいまして、今、日本国内では中公文庫で６分冊に分かれてます。１つずつがものすごく分厚い６分冊に分かれているんですね。それを読むことによって、コーランの意味がわかるというわけなんですね。

ですから、こどもニュースで、イスラム教とはというのを正確に説明しようとして、結局、コーランを読むことになった。そして、コーランを読むと、じゃあ、イスラム教の神様、ア

ッラーっていうでしょう。よくイスラム教徒というのは、アッラーという神様を信じているという言い方しますよね。これ、実はあんまり正確じゃないんですね。アッラーという神様ではなくて、アッラーというのはアラビア語で神様という意味にすぎないんですね。英語にすれば、これはゴッドということになります。ヘブライ語でいえばヤハウェと同じことなんですね。全部同じ神様なんですね。

これ、ですから、もともと神様がユダヤ人たちに神の言葉を伝えた。ユダヤ人たちはそれを聖書という形でまとめていた。ところが、ユダヤ人たちは神様の言うことをちゃんと聞かない。怒った神様は新たに神の言葉を伝えようとして、イエスに神様の言葉を伝えた。そして、イエスがいろんなことを言っていることが後に新しく聖書としてまとめられた。そして、前の聖書に対して新しい聖書である。で、イエスが十字架にかけられて死んだことによって、人間と神様が新たな契約を結んだというようにキリスト教徒の人たちは考えて、新しい約束の聖書というのでこれを新約聖書といい、古い聖書、ユダヤ人が信じていた聖書を旧約聖書と名づけるということになったわけですね。ところが、イスラム教徒からすると、まだキリスト教徒も神様の言葉をちゃんと守っていない。そこで、神様はこれが最後だぞと言って、ムハンマドに改めて神様の言葉を伝えた、これがコーランという、こういう構造になってるんですね。こういう構造になってるってことを知れば、当然、旧約聖書、あるいは新約聖書のことも勉強しなければいけないと、こういうことになってくるわけですね。

こうやって次々に学ばなければいけないということを知り、それはどんどん広がっていくということになったとこういうわけですね。結局、こどもニュースをやることによって、いろんな新しいことを勉強することになりました。そして、それを子供たちに伝えなければいけませんよね。これがまた大変難しいことですよね。わかったからといってすぐ伝えることができない。よく皆さんね、何か勉強するとするでしょう。で、何か難しいことをいろいろ勉強してよくわかったって言うと、友達が、あ、わかったんだ、じゃあ、説明してって言われるとね、説明しようとすると、わかってたはずなのに説明できないってこと結構あるでしょう。自分がわかったということと、それを人に説明できるくらいにわかったということの間には、深くて暗い川が流れているということがあるんですね。人間ってそういうものなんですね。わかったつもりでも人に説明できないということが幾らでもあります。どうすればいいのか。これは、アウトプットを意識したインプットということになります。アウトプット、つまり人に説明をするというアウトプットを意識してインプットをする、つまり勉強をするということなんですね。私もただ何か難しいことを勉強しても、何かわかった気になってもそれっきりなんですね。ところが、こどもニュースのころに、とにかくその難しい話を子供にわかるように説明しなければいけないとなると、さあ、これを子供に説明するにはどうしたらいいんだろうかという問題意識を持って勉強すると、おもしろいように頭に入ってくるということがありました。

例えば、日本銀行が金融緩和をする、量的緩和をするなんていうニュースが出てくるわけですよね。そうすると、当然、これを子供たちに説明しなければいけなくなる。日本銀行とは、というのを説明するわけですね。日本銀行とはどんな仕事というと、それこそ普通の専門書を見ると、日本銀行は政府の銀行であり、発券銀行であり、銀行にとっての銀行である

って書いてあるわけですよね。ただ、それを覚えただけじゃ、何のことか全くわからないですよね。これを例えば、政府の銀行っていうのを子供にどうやって説明しようかと考えることから意味がわかってくるんですね。政府の銀行って何か。政府にとってのお財布、それが日銀の金庫ってことなんですね。私たちが納めた税金、政府がこれを集めるわけですけど、その集めたお金をどこかに管理しなければいけないわけですよね。政府がそんな金庫を持っているわけではないので、日本銀行にそれを預けるんだ、だから、政府にとってのお財布の役割、それが日本銀行なんだ、こういう言い方をすればわかってもらえるだろう、とこうなりますよね。

あるいは、銀行の銀行が日本銀行だ、何だろうってことになるわけですが、つまり私たちは日本銀行にお金を預金することができない。私たちが預金できるのは、身近なところにある銀行だったり、信用金庫だったり、信用組合だったり、あるいはＪＡバンクだったり、地域に合わせてそれぞれ言わないとね、ただ銀行って言うだけだと語弊がありますから、とりあえず考えられる金融機関の名前を全部言いましたけどね。まだありましたね、労働金庫というのもありましたね。そういう金融機関にこういうお金を預ける。私たちはそういうことができるけど、日銀に預けることはできない。一方、そういう金融機関は、日本銀行に当座預金口座というのを持っていて、ここにお金を預けることができるし、いざっていうときには、日本銀行からお金を借りることもできるんだよ。これが銀行にとっての銀行ですよね。こういう言い方をすれば、子供たちにも理解してもらえるし、そういうふうに子供たちに説明しようという問題意識を持って勉強したもんですから、今、私はこうやって日銀の仕組みを説明できるようになったということなんですね。

常にこうやってアウトプットを意識してインプットをすると、おもしろいように頭に入ってくるということがあります。ぜひ皆さん方、これから、さまざまなところで勉強しなければいけないというときに、ただ勉強するだけではない、これを例えば、家族に説明をする、子供に説明をする、孫に説明をする、あるいはおじいちゃんやおばあちゃんに説明をする。医療関係者にしてみれば、患者さんに説明をするというところに、どのようにすればそれができるんだろうか。これを患者さんに説明するためには、どんな説明、言い方をしたらいいんだろうかという問題意識を持って専門的なことを勉強すると、これがすっと頭に入ってくるということがあります。常にアウトプットを意識したインプットということですね。

で、その勉強なんですけども、私、大学生のころに、十分な勉強はしなかったんですが、その一方で、何とかこう勉強しなければいけないんじゃないかという思いがあって、岩波文庫というのがありますよね。で、貧乏学生だったもんですから、なかなか岩波文庫も高いのは買えない。当時、岩波文庫というのは、星の数で値段を決めていたんですね、私の学生時代。考えてみれば、ものすごくアバウトですよね。星１つは５０円、星２つなら１００円、星３つなら１５０円という値段を決めていました。ちょっと高い本は買えないので、よし、星１つの文庫は全部買って読もうと考えたんですね。そして、そこで手にとって買った本、「読書について」というショウペン・ハウエルの岩波文庫があります。当時、星１つ５０円だったんですが、現在、本体価格５４０円ということになってます。消費税を入れると値段が１１倍にもなってるなあということがわかるわけですが。とにかく私は本を読んで一生懸

命勉強していた。本を読めば勉強になるんだろうと思ってた。読書についてって書いてあるから、さぞかし本は役に立つって書いてあるんだろうと思って読んでたら、びっくりする一節に出くわしました。ちょっとその部分を読んでみますね。こう書いてあります。

「読書は、他人にものを考えてもらうことである。本を読む我々は、他人の考えた過程を反復的にたどるにすぎない。習字の練習をする生徒が先生の鉛筆書きの線をペンでたどるようなものである。だから読書の際には、ものを考える苦労はほとんどない。自分で思索する仕事をやめて読書に移るとき、ほっとした気持ちになるのもそのためである。だが、読書にいそしむ限り、実は我々の頭は他人の思想の運動場にすぎない。そのため、時にはぼんやりと時間を潰すことがあっても、ほとんど丸一日を多読に費やす勤勉な人間は、次第に自分でものを考える力を失っていく。」びっくりしましたね。本を読む、本を読めば勉強になり、自分がいろんなものを考える力がつくんだと思ってたら、そうじゃないっていうんですね。確かにそれに書いてあるものは、その著者の思想ですよね。それをただなぞったところで、自分の思想が生まれるわけではないんだ。衝撃的な一節でした。だからといって、ショウペン・ハウエルは本を読むのは無駄だと言ってるわけではないんですね。よくこうやって数多くの本を読んでいれば、少しずつエッセンスが自分の頭に入ってくるし、大事なことは本を閉じて、自分の頭で考えてみることだ、とこういうことなんですね。

ですから、まずはとにかく本を読む。本を読んでも次から次へと本を読むのではなく、本を１冊読み終わったら、一度本を閉じてみて、改めて自分で考えてみるということですよね。さあ、著者は何を言いたかったんだろうか。そして、著者が言いたかったことは本当にそうなんだろうか。賛成だろうか、反対だろうか。もし反対ならば、自分はどう考えるんだろうか。そういう自分の頭で考えてみるという時間を持つ、これが実は大事なことだと思うんですね。そもそも本を読まなきゃだめなんですよ。本は読まなければいけないけど、ただ本を読んでいればいいってものではない。本を読んだら、今度はそれをもとに自分の頭で考えてみる、そういうことが求められているのではないかということなんですね。

私の父は、もう今亡くなりましたけど、かつて８８、米寿を迎えた直後から急に体力が弱って、寝たきりになったんですね。そのときに、例えば新聞広告で、彼は岩波書店から広辞苑の第４版が出たらしい、それを買ってきてくれと言うんですね。広辞苑、岩波書店が出してる本当に分厚い本ですよね。今、電子版もありますけど、紙の本は物すごく分厚い。それが、１０年ぐらいごとに新しい版を出すんですね。第４版が出た、それを買ってきてくれっていうんですね。こんな分厚い重いもの、買ってきてどうするんだよ、寝たきりになったのにと思ったんですけど、たまには親孝行しなきゃいけないのかなと思って、それを買って、彼に渡したんですね。そうしたら、彼はどうしたのか。枕元に広辞苑を置いて、１ページ１ページ、それをページを繰りながら、中身を読み始めるんですよ。びっくりしましたね。国語辞典っていうのはわからない言葉が出てきたときに引くものだと思ってたら、彼はそれを読んでるんですね。何という向学心、向上心、好奇心、何か頭が下がる思いがしました。たとえ寝たきりになっても、頭がはっきりしていれば勉強することができるんだということなんですね。それから、間もなくして父は亡くなりました。今、広辞苑は第６版が出ていますが、私にとっては第４版が宝物なんですね。第４版を見るたびに、あ、人間は幾つになって

も勉強することができるんだってことを思い出します。

今、ここにきょうね、せっかくのこのいい天気の日曜日に、わざわざここに皆さんいらっしゃった。向学心に燃えているわけですね。今からでも、学び直すこと、決して遅いことはないですからね。それぞれの方、幾つになってもこれから勉強すること、決して遅いことはない。幾つになっても常に勉強し続けることができる。そして、学びたい、新しい知識を吸収したいというこの意欲、この意欲を持っている限り、精神的に年をとることはないんですね。確かに肉体的に、物理的にはみんな人間、年をとりますけれども、常に好奇心を持って、新しいことを吸収したい、そういうみずみずしい思いを持っていれば、人は老いることがないんですね。常に現役でいることができる。ぜひ、皆さんもこれから、さらに、もっともっと勉強して、そして、勉強しながら、生涯現役であっていただきたいなと思います。１時間の予定が３分３０秒オーバーしてしまいました。時間になりました。ありがとうございました。

第２部　記念対談

テーマ：「少子・高齢化社会における医療と教育のあり方！」

対談者：島根県健康福祉部部長　　原　仁史 氏
　　国立大学法人島根大学学長　　小林祥泰 氏
　　雲南市長　　速水雄一 氏
　　雲南市立病院事業管理者　　松井　譲 氏
　　記念講演講師　　池上　彰 氏

進行役：雲南地域医療を考える会会長　関　龍太郎

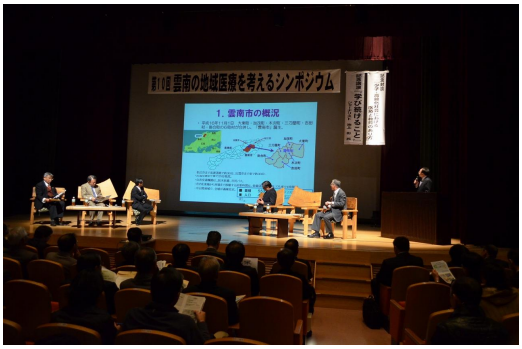
【関会長】どうも皆さん、ありがとうございます。

医療を考えていくということで、今日はそれぞれの立場から現在の医師を取り巻く情勢、医療を取り巻く情勢について、話を進めていきたいというふうに思います。

まず、最初に、速水市長さん、雲南の様子について少しパワーポイントで御説明お願いいたします。

【速水氏】それでは、私のほうから最初、話題提供ということで、皆様、お手元に資料あるかと思いますが、それに沿った発表をさせていただきたいと思います。

私のほうからは、市民と行政、医療機関との協働と連携によって、この医療人材の確保をいかに行っていくかということについてお話をいたします。



まず、そのために雲南市の概況でございますが、雲南市は御紹介いたしましたように、平成１６年の１１月１日、６つの町が一緒になって誕生した面積５５３平方キロ、人口が現在約４万２，０００人の市でございまして、県内８つの市の中で初めて市制をとった自治体でございます。松江市と

出雲市に挟まれていて、ここから両市に約車で３０分、出雲空港まで２０分から２５分、そしてまた、市内東西、車で約１時間、中山間地域中の中山間地域で、全地域　が過疎指定という町であります。

そうした雲南市にもごらんいただくようなすばらしいこの地域資源、あるいは観光資源、恵まれているわけでありますが、加茂町からは、全国最多の３９個の銅鐸が出て国宝に指定されている。そして、木次町は、全国桜名所１００選に選ばれたすばらしい桜並木がある。吉田町には、たたら製鉄の遺構が全国唯一、世界唯一と言っていいわけでございますが、現存しておりますし、大東町はスサノオノミコトとクシイナダヒメがつくられたと言われる日本で初めての宮、須我神社がありますし、ここは和歌発祥の地ということでよく知られております。

そうした雲南市でございますが、人口で見ますと、合併時、４万５，０００人でありましたけれども、現在は約４万人。これが１０年後、まちづくりの１０年計画を立てているという冒頭の挨拶申し上げましたけども、平成３６年になりますと、前の総務大臣、増田寛也さんが示された報告では、平成３６年には３万５，０２９人になる。また５，０００人減るという報告がされております。

そうした雲南市の高齢化を見ますと、今、平成２６年ですが、平成２７年、来年は高齢化率が約３６％。全国が３６％になるのが平成５２年と見込まれておりますので、２５年先の全国の状況にある。したがって、全国がいずれ迎える高齢化という課題に今、直面しているということで、課題先進地というふうな表現もせざるを得ないというふうに思います。

そうした雲南市でありますけれども、圏域別の７医療圏域の中での６５歳の平均余命を比べてみますと、何と雲南市は男性も女性も一番高い割合を示している。それだけ高齢者が多い状況にありますが、それであれば、なるほど、平均余命が高くて、高齢化率３６％であるけれども、老若男女がみんな元気で生き生きと暮らしている、そんな雲南圏域をつくっていこうではないか。つまり、さっき言いました課題先進地から課題を解決している先進地、課題先進地になろうではないかという今はまちづくりを目指そうとしております。ちなみに、前の東大の学長であります小宮山宏先生が提唱されましたプラチナ構想ネットワークという全国組織がありますけれども、その全国組織から雲南市は市民の皆さんがプラチナのようにきらきら輝いている、そうした自治体というふうに認定をいただきまして、今日が１６日でありますが、２１日にはその認定書をいただくことになっております。これを機会に、ぜひとも雲南市はプラチナシティを目指そうと、そういうまちづくり計画を立てようではないかというふうに思っているところでありますが、そうした雲南市でありますけれども、ここに記載しておりますように、雲南市は本当に世代が触れ合う家族の暮らしがある。実に雲南市の３世代同居率３３％いうことで、めったに見られないような家族構成の雲南市でございます。そうした家族がたくさんある地域であれば、笑顔あふれる地域のきずながある。そして、美しい農山村の風景がある。多彩な歴史遺産がある。新鮮で安心・安全な食と農がある。こういった５つの恵みを生かしたまちづくりをやろうではないかいうことでございます。

そうした雲南市は、じゃあ、安心して医療機関を利用できるかどうかという平成２６年の市民アンケートを見ますと、年代別に５０代、２０歳代が６２，３％ということであります

が、大変高いところは９３％ということで、大体６０％から９０％以上の方がそう思っていただいているということでございます。

じゃあ、非常に医療環境に恵まれているかということになりますと、雲南医療圏域は１０万人当たり１３２人の医師しかいない。７医療圏域から比べると一番低いし、島根県平均でも一番低いですが、全国平均と比べても随分と劣っているという状況を反映して、雲南市立病院は今現在、１０月末で常勤医が１８人でございます。ピーク時が雲南市立病院の常勤医３４人という状況でありましたので、それから比べますと、約半分の状況でございます。しかし、そうした大変なこの医師数の少ない状況にありますけれども、病床稼働率はということになりますと、９０％、あるいはそれを超している状況にありまして、県内の同規模の病院では断トツに高い状況にあります。それだけに雲南市立病院の医療従事者の方々は、大変な目いっぱいの負担の中で頑張っていただいている、いう状況であります。

それだけに、次世代の医療を担う人材の育成こそ最大の課題だということで、今掲げております４つの視点からその人材育成対策に取り組んでいるところであります。

これは冒頭の御挨拶の中でも言いましたけれども、雲南市の地域枠推薦で、医学部にただいま現在１７人の、そしてまた、看護学生として石見高等看護学院に１１人の入学をしていただいておりますが、そのうち、既に６人は看護師として市立病院に勤めていただいております。

これは、そうした地域枠推薦学生と医師と行政との交流会、年に２回開催しておりますが、毎年、春と秋行っておりますけれども、この秋にはつい２日前、１４日、金曜日に、この秋の場合には推薦医学生との交流会でございましたけれども、本当に回を追うごとにこの医学生の皆さん方の雲南市に対する、あるいは地域に対する思い、強くなっているなあ。本当に顔が半年ごとに合わせますと随分と変わってきてる、成長した面持ちになっているということで、本当に感激しておりますけれども、この学生の皆さん方、本当に地域に対する愛着が強い、そうした意味から、チーム雲南と名づけておりますけれども、頑張っていただいているところでございます。

そうした病院と行政の取り組みに加えて、市立病院におきましては、地域医療人育成センターを設立いただいておりまして、ここではちょっと見えにくいかと思いますけれども、地域医療を目指す医師の皆さん方の指導をやっている。そして、また医学生、看護学生の研修の場となっている。そして、中学生、高校生の職場体験にも大いに力を発揮いただいてる、こういうことでございます。

また３番目に、この子供のころからの医療体験・学習ということで、幸雲南塾ｉｎさんべ、これは雲南市に７つの中学校がありますが、全員で約３５０名おりますけど、その約半数が

１泊２日でさまざまな体験をする塾であります。

それからまた、市民の皆さんも随分頑張っていただいておりまして、こうした支援団体がございます。

こうしたこの市民の方々が、今日こうしてシンポジウムを開催しておりますけれども、時にはパネリストとして参加していただき、そしてまた研修医、看護学生の皆さん方もパネリストとして参加いただいて、いろいろ壇上でこの会場の皆さんとやりとりをしていただく、その姿を見て、高校生が地域枠推薦で医学生として、あるいは看護学生として入学いただいて、今のように１７人の医学生、１１人の看護学生の状況になっている。

そしてまた、研修生もさまざまなところから来ていただきますと、ボランティアの皆さん方が民泊で受け入れていただいて、よく来た、地域医療についての理解をもっと深めてもらうということで協力をいただいております。

それから、これはうんなん医療体験ツアーということで、若者による地域活性化支援団体でございますけれども、これはまた、３回開催しておりまして、市外、県外から延べ３６人の方がこの雲南市に医療体験ツアーとして来ていただいております。このことによって、うち２名が市立病院に既に保健師さんとして１人、看護師さんとして１人、勤めていただいておりますし、それから、自分たちの地域は自分たちでつくるという地域自主組織という任意団体、支援団体がありますが、そこの福祉推進員としても勤めていただいております。

こういった地域、次世代の医療を担う人材をみんなで育成する、そしてまた、そうしたことに市民の皆さんがしっかりかかわってくださる、そういったことで住みやすいまちづくりを進めていこう。そして、そのことによって安心・安全、活力とにぎわい、健康長寿・生涯現役が実現できるまちづくりに努めようとしてる雲南市でありますことを申し上げて、話題提供の一つとして御参考いただければと思います。

【関会長】どうもありがとうございます。

いろんな取り組みをされているということなんですが、ずっと医師として、もう３０年ぐらいになると思うんですが、松井先生、どうなんでしょう、今の話を聞いて、病院の立場でちょっとお話を伺いたく思います。

【松井氏】少し補足をさせていただきますけども、そもそもこのシンポジウムが始まったきっかけというのは、平成１６年からの、いわゆる新医師臨床研修制度ですね、これが引き金でございました。

私ども病院は、平成１５年までは島根、鳥取、岡山、３つの大学から比較的安定的に医師の供給があったわけでございますけども、その制度をきっかけといたしまして、先ほど市長が言いましたけども、医者の数が半分になってしまいました。

当然ながら、地域の医療が十分に支え切れない状況になりましたし、経営的にも大変に厳しい状況になったわけでございます。そういった状況の中で、中山間地の医療を今後どうするのかと真剣に考える機会を与えていただいたというふうに思っております。

日本全国の田舎の病院というのは、ほぼ同じような状況に置かれたわけでございまして、同じようなシンポジウムとか住民活動、病院改革はこういう雑誌とかメディアにも取り上げられたわけでございますけども、その議論の中で、中山間地の病院の将来っていうのはコミュニティーメディシン、つまりは、この圏域内で、地域地域で人材を育成する。そして機能を分担する。そして連携をすると。そして地域包括ケアを行うということがキーワードであろうということは、これは全国の共通認識だろうというふうに思うんですね。そういった観点から、先ほど市長さんが話していただきましたけども、いろんな取り組みを行ってきたわけです。

もう少し具体的にお話をいたしますと、１つ目は、地域医療人育成センター、これは現在の大谷病院長が中心になって平成２１年に設立をいたしました。自分が生まれたところで医療人としてこの地域に貢献をするということ。そしてまた、この雲南地域が好きになって住みついてくれる医療人を招き入れること。また今後、いわゆる全人的な医療というんですか、これには欠かせない総合医、これを養成する基盤をつくることなどなど取り組んできたわけでございます。

あと、連携に関して言いますと、病病連携、これ病院と病院の連携ですね。あと病診連携、病院と診療所の連携、これは当然でございますけども、まずは、その地域の住民の方、この方々との触れ合いを大事にするということですね。つまりは、病院を開かれたものにするということを目指そうとしたわけでございます。そういった中で、いろんな方との、ボランティアの方ですね、交流とかですね。先ほどありましたけども、病院祭の開催、あと医療の出前講座、こういったことを通じまして、多くの方と触れ合いを図ろうということでやってまいりました。

その結果でございますけども、おかげで平成２３年には、この地域医療人育成センターで研修した医者が２名、就職をしていただきました。あと、出前講座もこれ大変に人気でございまして、まだ十分に要望に応えられないぐらいに要望があるということでございます。あと病院の祭りも、これボランティアの方々の協力なくしてはできないほどに定着しつつあるということを大変にありがたく思ってるところでございます。

行政とか大学の支援を受けながら、自治体立の病院として地域の医療をいかにするかということを日々迷いながらの運営でございますけども、今日も何かヒントが得られればというふうに思ってるところです。

【関会長】どうもありがとうございました。

雲南の地域で頑張ってる２人の方なんですが、若干、県の立場からとか大学の立場からということで、雲南出身の県の部長さんであります、まず原さんのほうから少しお話を聞かせていただいたらと思います。

【原氏】原でございます。紹介ありましたように雲南市は大東町の出身でございます。たまたま健康福祉部長という職についております。その関係で今日のような地域医療に関するお話という場に出させていただいてると思います。

医師不足といいますか、地域医療の非常に厳しい実態、これ島根県、特に中山間地域ですとか、あるいは離島、そういったところにおいてどこでも厳しい状況、同じ問題点が出てきております。特に、この雲南地域においては大田圏域と並んで非常に医師の不足の状況等、深刻なところがあると思います。恐らくある意味綱渡りでやっているというところありましょうし、また、特に開業医さんあたりですと高齢化になっとられる方かなりおられると思いますから、今後１０年、２０年先が本当どうなっていくのか非常に不安な要素もあろうかなと思っております。

行政として、この地域医療にどうかかわっていくかということでございますが、こうした深いかかわりを持つようになったのはこの１０年間、まさに雲南地域でこうしたシンポジウムを開催しながら地域挙げて地域医療を守っていこうという、そういった運動が起こったのと同じ時期でございます。それまではほとんどもう大学のほうにおんぶしていたといいますか、後で学長先生のお話もあろうかと思いますが、これまでは本当に大学のそれぞれの医局ですね、教室、教室の先生方の御配慮によってそれぞれの地域の病院に医師を派遣していただいてたということがございましたが、ちょっと先ほどお話もあったように、初期臨床研修制度というものが平成１６年にスタートしました。これは、やはり医局という話ししましたけど、医局というものの中にやはり非常に問題点も抱えていたと、非常に若い医師の方々の環境というのが非常に厳しかった。適正な給与もしっかり払って、初期の研修を受けれるような形をつくっていく必要があろうかというようなことから新しい制度ができたんだと思いますけども、一方で、医局が持っていたその地域にとっては大切な役割という部分が非常にその段階で薄れてしまったということがございました。

そして、もう一つ大きな背景としましては、国民の医療費がどんどん増嵩していく。そういう医療費抑制をしていかないけないということが昭和５０年代後半ぐらいから言われておりまして、そのためには医師の数を抑制していく必要があるということで、大学の医学部の入学定員が昭和５９年から実に平成１９年まで、約２０年以上も抑制基調で来たということもございます。その他いろいろあるんですが、そういったことが現場のほうに顕著にあらわれたのが平成１６年以降です。島根県では平成１８年ぐらいから、離島、隠岐の産科医が１人もいなくなったというようなことが大ニュースになりましたけども、そういったことを通じて、県民の皆さん全体にそういう問題が島根県にとって非常に大きな課題だということがわかったということでございます。

行政もそれに合わせながら、何とかこれをやっていかないけないということで、それまでもかかわりは持ってたんですが、もっと深く入り込む必要があると。大学ともしっかり連携していく必要があるというようなことで、３本の柱をつくりました。

１つ、今日のお配りされている冊子の中にも９ページ以降、参考資料載せてありますので、そこを見ていただければ私が説明するまでもないことなんですが、３本の柱といいますのは、まず、即戦力の医師を呼ぼうと。医局が少し崩壊しまして、大学のほうで派遣する医師の確保ができなくなってきたということがあります。そうすると、やはり県外を含めて医師を呼んでこなきゃいけないということで、そのためのチームを組んで、即戦力医師の確保ということをまず１つの柱として立てております。これにつきましても、これまでそういう取り組みしてから１００名以上の方々を県内に招聘してきたという実績もございますが、これについてはいろいろ島根の医療体験ツアーもやってもらって、島根県がどういうところか、特に来られる方には１人で来られる方というより家族で、奥さんも来てもらいたい、一緒に来てもらいたいこともありますから、家族の方々にも島根県という地域の環境というのをしっかり知ってもらって、ここで働いてみようという気持ちになってもらえるような医師を引っ張ってこようということで努力してきております。

それと、もう一つ大きなのが育てるということでございます。この育てるというのは、なかなかそうはいっても即戦力医師、簡単に島根県にどんどん来てくれるというようなことはできませんので、やはりちょっと地道といいますか、中・長期的な戦略にはなるんですが、みずから育てていく必要があるということで、島根大学医学部のほうにも地域枠の入学制度をつくっていただいて、一方、行政では、そういった地域枠というのは松江、出雲地区以外の地域のところの高校生で医学部を目指す人、島大の医学部に入る人、そういう方々に特別な入学制度というものをつくって、その方々には基本的に島根県の地域医療に携わってもらうというような、ある意味、条件とまでは言いませんが、そういう気持ちを持つ方にそういう形で入ってきてもらうことと、あわせて、それに奨学金制度もセットにしまして、一定の期間を島根県で勤務していただければその奨学金の返還はしなくていいですよというような形のものをあわせてやってきております。

こういったことを始めたのが平成１８年ですので、今、平成２６年ですから、やっとそういう方々が巣立って、新しい若手医師として誕生してきているところがここ１０年前ぐらいから起こってきてることです。これからこの人たちがどううまく島根県に定着していくかということが非常に大事なんですが、こうした方々がこれから毎年２０名から３０名出てくる予定ですので、ぜひ、そういう方々は島根県内に残って地域医療に携わってほしいと。そのためには、やはり研修、特に若手のときには初期研修、後期研修含めていろいろ症例経験していく必要がありますから、そういう研修プログラムをしっかりつくっていく必要があるわけですね。そういうことをうまくローテーションで回れるようなプログラムづくりというようなことも必要だというところで、地域医療支援センターという、これ一般社団法人化しましたけども、そういったものもつくって、これは大学との連携のもとでつくったものなんですが、そこの活動の中から若手医師が安心して研修を積むことができるような形もとっております。そういうような育てるということがこれからますます重要になってくるということで、ここはすごく力入れていきたいなと思っています。

ちょっと時間が迫っているかもしれませんが、ちょっと話しますと、まずは大学を卒業して最初に研修受けるのは、先ほど言いました初期臨床研修ですね。最初２年間程度その研修

をやるんですが、奨学金等を条件づけしてる中では、これは卒業してから一定の期間内に奨学金の貸し付けた期間だけ地域に勤務してもらえればいいということをやってますから、最初からその義務を果たさなくてもいいっていうよりは、長い期間の中で一定の期間を地域医療に勤務してもらえればいいという仕組みなもんですから、初期臨床研修の場合は結構、外で、県外の病院で受けるという方もいたんですが、それで一旦外へ出られると、なかなか出た先のしがらみ等も出まして、島根にまた帰ってくるのがちょっと難しいというよりは、少し確率が落ちていくんじゃないかなという心配もあったわけですね。それはなぜかというと、初期臨床研修はその義務を果たす期間に入れてなかったんですよ。入れてなかったんですが、今回そこも、２年間島根県内で勤めれば義務期間の中にカウントするというような見直しをやったんです。そうしましたら、今回、初期臨床研修のマッチングというんですが、県内の地域医療機関で研修を受けるという方々が非常に増えました。地域枠の学生でいいますと、昨年は６２％ぐらいしか島根県の中には残らなかったんですが、今回９０％の方々が県内での初期臨床研修を受けるというようなことがあって、非常に今いい形ができてきたなという思いも持っております。そういう状況が育ってるということですね。

もう一つ、３番目の柱としては助けるというのがございます。看護師さんも含めて医療の勤務環境というのは非常に厳しいものがございます。医師の方々も本当に精神的な部分も含めて非常に負担感を感じておられると思います。昔以上にいろいろ事務的な作業もしなきゃならないというようなことがあって本当に大変だろうと思うんですが、そういったこととか、あとは少ない人数でやっておられる。場合によっては診療科がないようなところもあるというようなところを何とか補完するために、助けるために、行政として何らかのことはできないかということでいろいろやってるんですが、身近なところでは、そういった病院の医師がたまには研修も受けたいというようなときに代診医を派遣する。だから十分に研修を受けてきてくださいよと、そのかわり、ちゃんとかわりの医師は出しますからというような代診医派遣の仕組みですとか、あるいは雲南圏域、非常に利用されていますけど、ドクターヘリですね。本当に重篤な緊急の救急医療が必要な方については、出雲とか松江とかの大規模な病院のほうにドクターヘリで運ぶというようなことで、地域を超えてそういった医療の連携をつくっていくということもやってますし、それともう一つは、まめネットといいまして、医療情報ネットワーク、ＩＴを使ったネットワークを構築、基盤はもう整備しました。今、たくさんの医療機関に加入してもらっておりますが、診療情報を共有していくということですので、今日もＰＲもしてると思いますが、これから必要なのは、そのまめネットに加入してもらうことですね、登録してもらうこと。皆さんにもぜひそのことを前向きに考えてほしいんですが、もちろん個人情報ですから、非常に取り扱いには注意しなきゃなりません。その点とかも万全の管理をしながらやろうということでやっていますので、これを登録していただきますと、雲南の病院にかかってた方が何らかの形で松江のほうの病院にまた移ったりして、治療を受けるというような場合も情報が共有しますから、同じ診療をまた１からやるということでなくて、どういう薬剤が投与されてきたかとかそういうことが全部情報として得たりすることができるんで、これは患者さんにとっても、それから医療機関にとってもメリットがあることでございます。そういったことを島根県はある意味、全国に先駆けてやって

きております。中国５県も大体同じような取り組みが起こってますから、ドクターヘリも広域連携をやりましたけども、このまめネットの医療情報ネットワークもいずれは中国５県、特には県境の市町村ですね、雲南だったら飯南町とかですね。やはり隣県の病院にかかられることもあろうかと思いますから、そういったところでも情報が共有できるような、そういった仕組みをつくっていくと、この３本柱、一生懸命取り組んでおります。これが医師です。

また、あと看護師についても４本柱ということでやってるんですが、まず、やっぱり県内、いろいろ養成学校もふえてきましたので、県内の学校に看護師を目指す人はぜひ入っていただきたい。そして卒業後は県内の医療機関に就業していただくと。そして看護師になった以上は離職はしないでそのまま頑張って勤めてもらいたい。そして何らかの事情で、看護師の資格は持ってるけども一旦家庭に入られたというような方々には、一定の子育てとかが終われば、もう一度現場のほうに復帰していただくという再就職ですね、そういったところを支援するというようなことを４本の柱としてやってます。

これも一番大事なのは、やはり勤務環境が非常に劣悪ですね。夜勤があります。女性が多い職場なのに夜勤とかもあって非常に厳しい。ですので、新人の方で１年以内に離職するという方も結構おられます。ですので、そういうのをできるだけ少なめるようにするにはどうしたらいいかと、そういったところも行政として取り組んでいかなければいけないだろうと思っていますが、こういったことにも力入れてきてるところですし、今後もますます力を入れていこうというようなところです。

【関会長】島根大学の学長様、時間があんまりないかもしれんですが、ポイントを。だんだん、一番最後になりましたので。どうぞ。

【小林氏】大学として、まだ島根医大のころですが、医師不足、非常に問題になったのはこの１０年ですけども。１２年ぐらい前ですか、法人化の直前に、私まだ教授のときに、島根県の僻地医療委員会がありまして、そこに出ておりました。そこは病院長がみんな出ておりまして、私は内科の教授として、実際はこっちが派遣するわけですから、病院長は、おまえ、適当に頼むよで済むわけですけども、そこに出ておりました。こちらには市町村長さん、そして保健所長さんとか皆さんおられまして、何人医者がおらんのでここに派遣するようにというような陳情ばっかり受けておりました。これだけで、こういうことやっとったんじゃいかんのじゃないかと思い、それで地域枠ということを思いつきまして、それで、そのときにちょうど法人化になるころでしたので文科省に行きまして、法人化の前は国立大学というのは全国平等であると。だから島根県だけの人を優先するようなことはまかりならんと言われたんですね。我々のところが最初にやったんですが、それでもって後で全国に広まって、島根大を見習えとか言われてですね、急に。そういう話になりました。

そこで、今もずっとやってるのが僻地枠をやっております。先ほど説明ありましたように、

出雲と松江は除いて、もちろん高校はいいんですけども、生まれ育ったところが僻地であること。これはなぜかといいますと、地域枠なんて大昔からあるんですよ。公立大学のその、例えば北海道の札幌医大はもともと道立ですから、１００人のうち２０人はもともと北海道の人をとってるわけです。ところがどこでもいいわけですから、結局、そこから出た人は絶対、旭川から向こうは行かないんです、札幌、函館、旭川。だから知床半島からとればそこに帰った人がいるかもしれませんけども、絶対あの山越えないんですね。だから、あとまだ４０人ふやしても、ただ、これは無理じゃないかと思ったんですけども、そんなの和歌山もそうです。みんなそうです。ですから、それじゃいかん。だから僻地っていうか、進学校ばっかりじゃなくて行くべきだということで、考えていろいろ相談に行きました。

それで、やはり地域医療に責任持つ人は市町村長さんなわけですよ。校長先生じゃないんです。校長先生が全部推薦するんですけども、校長先生は地域医療のことなんか考えてませんから。これは考える必要ないわけです、別に職務じゃありませんから。僕は市町村長さんの推薦でぜひお願いできませんかって言ったら、これはだめって言われましてですね。最初は、医学教育課の課長はおもしろいですねって言われたんですけど、入試係がばちっと、そんな選挙でライバルを落とすような人はだめですとか言われて、そんなことはないと思ったんですけども。そういうことで、でも絶対に、僕はなぜこの地域枠、この僻地枠は日本で唯一なんですよ、うちがやってるのは。何が唯一かっていうのは、僻地の出身者ということと同時に、市町村長さんの面接が２回ある。それから、例えばその自分の地域の病院で、医療施設で１週間、それから介護施設で２日間の研修をして、そのレポートを出さすんです。これをやってるところはほかはありません。大変なんですね、それだけ皆さんにやってもらうの。だけども、これをやったおかげで地域枠の受験生のレベルが非常に高くなりました。全国の中でいまだに定員割れ１回もないのは多分うちだけじゃないかと思います。定員割れなくてもレベルが落ちとるとこは結構ありますけども、うちの場合は非常に、逆に言えば、例えば浜田にしても、雲南市もそうですけど、いい人を、これ普通に受験しても受かるような人を入れてくれると当然、合格率は高くなるわけです。そういうことでいい人が入ってくれてるということはすごくいい、それからモチベーションがとってもいいんですね。

例えば、隠岐高校のトップの子が野球部のキャプテンでした。それから、邑智郡の矢上高校から初めて入ったんですね。それまで全然入れなかったんですよ、津和野高校もそうでしたし。ところが、そういうところが地域枠に来たら行けるかもしれません。それで入ってくる。その隠岐高校も矢上高校も野球部のキャプテンでトップの子でした。ものすごく爽やかでしてね、もうみんな全員が、８人面接して全員がＡです。それはすばらしい。もちろんセンター試験も足切りで使うんですけど、それはもうゆうにクリアをして、しかも入ってからもすごく伸びてくれています。やっぱりモチベーションが高い、もともとそういう地域医療やりたいという気持ちを持ってそれで来てる。それで、しかも市町村長さんも面接して、こ

れはいいと言って、市町村長さんがみんな丸つけるわけじゃないんですよ。やはり、ただ行きたいだけっていうのはね、結構バツつけたりされてるんですけども。本当に面接してて、もう今までの、いわゆる予備校から来て、もう面接、島根医大に来たら地域医療と言えというような感じで、みんな面接で同じ答えするわけですよ。ちょっと突っ込めばすぐばれる。だから、そういうのと全然違う。だからそういう人をやっぱり育てる、地域で育てるっていうことが一番大事なんで、単に地域枠は地域からというだけじゃなくて、その気持ちですね。やはり江戸時代にも、みんな地元の医者をどうやって育てるかといったら、これみんなその地域のお金持ちの庄屋さんがよさそうな子供、優秀な子を見て、おまえ、ちょっと地元のために医者になれって勉強に行かせて帰してるんですね。

そういう意味で、地域枠を私はやっぱり最初からそのモチベーションを持った、そしてまた地域からもそれを育てるという、その気持ちがあって初めて行けると。だから、そういう意味では速水市長さん一生懸命、今、この雲南の地区は私は、こういう地域でいろいろ過疎化してるとこたくさんあるんですが、その中では最も今いろいろな取り組みをして、幸雲南塾ですか、そこでもうちの看護学科の卒業生が今日も手伝ってくれてますけども、非常にいろいろ頑張ってくれてますし、そういうものに大学としては教育、本当に一生懸命やりたいということをつくるのが一番大事かなと思っております。

いろいろな組織とか、いろんなことはもちろんあるんですけども、その気持ちを持つのをどうしてつくるかと。それに奨学金、県のほうからもいろいろいただいてありがたいと思いますけど、奨学金はどこも出してるんですよ。だけどなかなか定着しない。これをやはりしていくには教育かなと思っております。ほかにもいっぱいあるんですが、もう時間がないのでこれで終わらせていただきます。

【関会長】いやいや、まだ、もう一回、残していただきましたが、よろしくお願いします。

池上さん、どうでしょう、いろんな試みを今されているんですけど、コメントを。

【池上氏】コメントというよりちょっと教えていただきたいとこがありまして、先ほどちょっと触れていらっしゃいましたけど、自治医科大学の取り組みですよね、あれはもともと僻地医療を充実させようという形でやったのに、なぜこれが十分でないのか、お話がありましたけれども。これが１つですね。

あと、それから地域枠で推薦した人は、ちょっと言いにくいんですけど、学力はどうなのかという点、その２点いかがなんでしょうか。

【小林氏】後のほうですけど、地域枠の推薦で、学力はうちはもう追跡調査しましたけども、みんな大体、中以上でございます。非常にいいんですね。普通にやりますと、みんな大体、成績が悪くて、前期でも通らないぎりぎりのところを出してくるんですね。ほかはみんなそう。うちはなぜそれがいいのが来るかといいますと、やはり市町村長の面接を２回やるんですよ。それと、実際に地域の病院、例えばここだと雲南の病院で１週間やるわけですね。そうすると、院長先生とかいろいろな方と話をして、地域医療はこんなんなんだということが

わかるということと、それから、市町村長さんがいいやつをおまえ選べよといって高校の校長先生にプレッシャーかけるわけですよ。やはり入らないととんでもないことになりますし、一番最初、２回目ぐらいのときかな、私も全部の市町村長さんに電話いたしまして、よろしくお願いしますと。で、１回出さないとこがあって、それいけませんねと言って電話したことがあるんですけども、やはり一生懸命そうやって選んでいただく、いい子をみんな外に出してるわけですよね。だから、それを島根大学に入れてほしいと、そうすればレベルの高い子が来ると、そういうことが一つであります。

【池上氏】それってつまり、そうやって市町村長の面接まで受けていくっていうことは、本人のモチベーションに繋がる。

大体、大学に入った、よかったで終わっちゃうんだけど、大学に入って、ここから出て医者にならなければいけないという使命感みたいなものがあるってことなんでしょうかね。

【小林氏】はい。ずっと続くかどうかわかりませんが、少なくともその面接のレベルとか、中に入ったのから見ると、それは明らかにあると。ただ、これをずっと維持させるのはまたその後のいろいろなことが必要であろう。

それから、自治医大ができて、あれだけやったのになぜかということですが、島根県も毎年２人ぐらいずつ、ただ、これは結構、１億何千万払うわけですね。医者１人について６，０００万、あれはもっと高くなるかもしれませんけど。それで、それは確かに全部、地域医療のところの任務もあってすごく貢献はしてるんですけども、義務年限が９年間なんです。９年たちますと、もうそれだけあちこち地域だけ回ってると、皆さん、何ていいますか、それですごく、その専門家になる方はいいんですが、ポストというものも一つあるんですね。病院長とかなかなかなれないということと専門医になかなかなれないんです。結局、総合的なものばかりになっちゃうとですね、そういうこともあって、その後、大学に戻ったり、あるいはほかの病院に行って専門医になったり研究をしたりというようなこと。だから、これをやはりそういうふうに厳密にしないで、もっとまぜ合わせたほうがいいのではないかというのがうちの、我々のやった僻地枠のあれは、だからその期間、奨学金の部分を少し延ばしてるのは、その間に大学院に行ってもいいよとか、それから外国に行ってもいいよと、いろいろなことで専門医も取れる、そういうことにしないと、やはりその先やってくれない。だから半分ぐらいは結局そこでやめて外に行ってしまう。これはおそらく全国的に見てもそうなるので、結局、僻地にとか、そういうところでずっとというのはそうはなかなか続かないということがあります。

【池上氏】感想ということなんですけど、私、信州大学でも実は出張講義で授業、特任教授でやってるんですけど、信州大学の医学部でお話を聞いたら、やはり長野県出身者が非常に少ないと。みんな全国で、とにかく医学部に入りたいんだって入ってくる人がいて、せっかくここで一生懸命教えても、その後みんな出ていっちゃうんだよという悩みをおっしゃっていました。つまり、入る部分からこういう努力をしていらっしゃるのかなというのがなるほ

どなと思いましたよね。非常に意欲的なおもしろい取り組みですし、これをさらに、広げていくといいますかね、地元だからこそまた地元にも戻ろうという気になる。やはり自治医科大学、今のお話聞いても、だから僻地医療に貢献するんだよって思いはあっても、自分の出身でないとちょっとどこか難しいところがありますよね。そういう意味で本当に地元に戻ってくるような仕組みというのが非常にいいし、さらにこれをもうちょっと何かいいアイデアなり、何かモチベーションなりをつくっていくといいのかなっていう思いがありますね。

【原氏】今の関係で、モチベーションが非常に大事、私も入学生の歓迎会とかにも出ますけど、本当にもうすごいですね。地域医療に対する使命感というか、本当に高い志を持ってる学生が多いです。ただ、それが本当に続くかどうかとおっしゃったんですが、そこが重要なことですが、県として寄附講座という形で地域医療支援学講座というのを島根大学に設けさせてもらってるんです。ですから、入学してからもずっと地域医療というものとかかわりを持つ、そこでやはりそういったモチベーションというものを一層強くしてもらうというような形は、一応、行政と連携してつくったりもしてる一つの工夫だと思っています。

【関会長】今日は「少子・高齢化」と書いているんですね。

今、速水市長さんが言われたように、どうも雲南市の人口、今さっき見せていただいたら、ずっと右下がりになっていきそうで、それに対する政策っていうのも考えていかないといけんと思うんですが、その辺、まず、県からいきますか。

【原氏】日本創生会議の増田先生のほうからショッキングな報告もありましたけども、やはり少子化問題、これからもう全国的な問題です。中で、特に女性の適齢期の人口ですね、そこを増やさないといけない。２０歳から３９歳と、出産適齢期ということなんですが、そういうようなところの一番の受け皿というのは、私たちが所管してます医療・介護の分野かなと思っています。特に看護師さんとか保育士さん、あとは女性の就業割合が高い職場というのがありますし、かつ、そういった職場ではまだまだ人材不足という状況が起こってます。ですので、ニーズもある、そして女性の受け皿にもなるということで、そういう方々ができるだけ、県内にとどまってほしいし、その上で、県外からもそういった若い女性の方に島根県に入ってきてもらうというようなことをするのが非常に重要だなということをすごく思ってます。

それと、あと高齢化の問題、これからどんどん高齢化が進んで、市町村によってはもう高齢人口そのものが今後は減っていくというような自治体も出てきてはおるんですが、そういう意味でいうと、都会で、特に島根県出身で都会に出られた方々が定年で第２の人生を考えるときに、もう一度島根県に戻ることを考えていただく。そのためにやはりしっかりした、住まいも含めた受け皿をつくっていく必要があるかなと。だから介護状態になって帰られるんじゃなくて、元気なうちに帰ってきてもらうということが非常に重要だと思ってます。

元気なうちに帰ってこられるときに１つネックがあって、特に医療保険制度ですね。会社をやめれば国民健康保険に入られる方が多いと思いますけど、国保については介護保険と同

じように住所地特例というのがあって、もともといた住所のほうが負担をするという形、自治体が負担するという形が仕組みとしてあります。それが７５歳の後期高齢者になって後期高齢者医療制度の適用を受けるとなると、その住所地特例というのが適用されなくなっちゃうんですね。そうすると、元気な人に帰ってもらったときはいいんですけど、その方が７５歳以上になると途端に地元の自治体の負担、あるいは県の負担、そういったものがぼっとふえると、これはまたちょっと、いわゆる島根県のような財政力が弱いところ、自治体、本当に大変だということで、国のほうにもそういうのを後期高齢者になっても適用してもらうように要望もしてきましたけど、最近の情報では、何かそれもそういう方向で見直すというような国のほうの動きが報じられましたので、これは一つ、非常に島根県にとっては朗報かなと思っています。

そういう意味で、若い女性とそれから元気な高齢者、こういった方々にぜひ島根県においでいただきたいということをＰＲして終わります。

【速水氏】今の少子化対策云々っていうことですが、まず、そのことについては本当に雲南市にとってもそうなんですけど、島根県にとっても喫緊の課題であると思っております。一番の要因は、東京一極集中がどんどんどんどん進んで、特に２０代、３０代の産み育てる年齢層、世帯層が出ていってるんですね。それで、東京に行くと産み育てることができなくて、合計特殊出生率も１そこそこ、だから都会はどんどん少子化に拍車がかかる。しかし、そうじゃなくて、この産み育てることができる環境にすれば、ずっと都会よりも島根県が、その中では雲南市がいいよということの環境をしっかりつくっていかなきゃいけない。

したがって、差し当たっては社会増を２０代、３０代の年齢層、世帯層が出ていかないように、そしてまた、そういった層が入ってくるような環境づくりやっていかなきゃいけない。そのためには、まず田舎は暮らしにくいというようなイメージを払拭するような暮らしやすい地域づくり、これが現実行われているよっていうことを、現在住んでる人たちはもちろん、来てみたら本当にいいところだったわというように思ってもらえるような環境づくり、まちづくりがしっかりされていないといけない。そのときに、じゃあ来てみたら、ああ、住みたくなった、家を建てたいんだけどというときに、この地域は土地も安くて、そして固定資産税も５年間ぐらいはかからなくて、それで土地代はほとんど要らずに家が建てることができて、あるいは子育て環境がよくて、そして教育環境もレベルが高くて、そういう思いが実感できるような、そういう環境づくりをしていく。そして、そういう２０代、３０代の人たちが頑張るような仕組みをつくるために、今、雲南市は都会から、そういう田舎って結構、生活環境いい、だったら自分たちもそこに住もう。そして田舎にも拠点を置いて、都会にも拠点を置いて、そして生活をしていくための拠点を２つ持とう、セカンドハウスじゃなくて２つ持とうと。そういったものを、１拠点をこの雲南市に、雲南地域に置いていただこうということでいろんなことをやって、今、本当に多くの方が雲南地域に入っていただいて、例えば空き家を改修してシェアハウスということで、今月末には１軒の家に１９人入られる予定になってるんですが、うち１３人が都会の方で６人が市内の方でそれでシェアオフィス、住宅もシェアして住んでいただく、そんな環境をハード的にもソフト的にも構築していく必要

があると思っております。そして、結構、自分たち、産み育てることのできる世帯、雲南市はいいとこだということで情報発信を積極的にやっていただく、そんな環境づくりが必要だというふうに思っています。

それから、もう一つ、さっきの医療人材を育てるに当たってモチベーションが高くないといけないよというお話がありました。本当にそうだと思うんです。したがって、私ども地域枠推薦の学生と面接、２回やるんですけど、まず第一に何が大事かっていうと、どれだけ雲南市に対して地域に対する愛着、誇り、自信を持ってるかということが大前提にあって、じゃあ、何で医療職を選ぼうとしてるのっていうそこのところを確認しなきゃいけないと思っております。だから、医療職になることだけの動機ではなかなかその人を見きわめることができない。だから地域に対する愛着、誇り、自信をどれだけ持って育ってきたかいうことがその人の医療人になるための背景として感じられないと、なかなかぺたんとオーケーという判を押せないというような気持ちでやっております。

それで、今そういった気持ちになるためには、この域内に住んでる人たちとの仲間同士、あるいは先生との対話関係だけではだめで、自分たちよりちょっと上の兄貴やお姉さん、そういった方々と、そしてまた、市外、県外に住んでる人たちとの語り場の、語る場がないといけない。

全国組織としてカタリバという組織がありますけれども、その方々に今、雲南市に入ってきていただいて、中学生、高校生、あるいは若い社会人の方々の斜めの関係の、いろいろな話し合う機会、また、アラーレという組織もありますけれども、そういったところの方々との話し合いによって早く自分の夢をつかむ、そういったその環境づくりが少子高齢化の根本的な対策にもつながりますし、医療人を育てていくためのツールにもなるというふうに思っております。

【関会長】確かにそうなんですね。考えてみたら医者とか看護師だけがふえても困りますもんね。そういう意味でやっぱりいろんな職種がふえてもらわないといけないですから。

次に、島根大学はどんな工夫で頑張ろうとしてますか。

【小林氏】例えば病院に今、医者が足らない、看護師が足らない。それじゃあ、もし今、医者が倍になったらどうされますかと、速水市長、雇っていただけますかということになるわけですね。これは要は今、人口が減ってます。患者さんが減ってます。これは島根県が日本でトップを行ってます。なぜ高齢者比率が今３番目に落ちたかっていうと、うんと長寿だった方が今どんどん亡くなってるわけですね。５，０００人毎年減る人口の中の今、前は社会減が多かったんです。要は９０万から７０万まで減ったわけですけども、今は自然減のほうがずっと多いですよね。ということは、私、去年このことに初めて気がついた。それは雲南の病院なんかその前からいろいろあったかもしれませんけども、いよいよこれは、出雲とか松江の大きい病院で実は患者さんが減って赤字が出たんです。初めてなんですが、私もずっと病院長やってました。右肩上がりで頑張ってたんですね。それまでは、県立中央病院にしても患者が多くて困る、おまえ、そんなん送るなとかね、松江日赤なんかまだ言ってますけ

ど、そんなもの送るなと、救急。そして、もう寝たきりの人どうのこうのつってさんざん言って、そういう方がみんな、我々も努力したせいもあるんですけど、みとりの医療がすごく徹底したんですね、あっという間に。で、今度は何にもしなくなっちゃったんですね、その医療に関しては、検査も何にもしない。そういう状況下で病院に来なくなった。かなりそれが大きくなってるのと同時に、先ほど言われました、元気な患者さんって言ったら失礼ですけども、来られてぱっと例えば心臓の手術するとかいろんなことになるような方、例えばもう９０幾つであんまり、不自由な方が来られて、そんなすぐ心臓の手術しましょうかなんてことはないわけでありまして、そうすると、高度医療が使えるものは少なくなってきてます。これはもう当然のことです。ですから、病院の軒並み金が減ったんですね。初め大学病院だけが何かね、たるんでるかとか言っていたら、ほかがみんなそうでありました。県立中央病院は病棟の閉鎖までしたんですね。

ですから、そういうところで非常に大学としても大変な努力を今してるところで、これは間もなくもっと顕在化してきます。あと何年かするうちにこの地域、地方はみんなそうなってきます。あと１０年すればそれがもろに出てくる。だから、厚労省はもう既にそれを見越して、超急性期のところを減らしてこっちにというところはもう既に見越してるんです。だけど、現場で体感をしたのは多分、私どものとこが初めてだというふうに思います。ですから、人口が減ったらそれだけこっちも減らなくちゃいけないんですね。そのためにヘリコプターとかいろいろなことを使ってやるということになってますので、その状況下で全部ここにそろえましょうというのは、もうこれから不可能になってくるわけであります。じゃあ、そろえて、そしたら、いや、できないことはないですよ。だけど、そのお金をどうするのかと、それ全部税金ですから。そうすると市立病院ですと、その分を全部ということになるとこれは大変、ですから、役割の分担をきっちりしないといけないなと思います。

それで、最近、厚労省も包括医療ケアというのをいってますけども、あれよりもさらに進んだ、内閣府がやってるのは、今アメリカとかヨーロッパでもやっていますが、アメリカの特にインテグレーテッド・ヘルスケア・ネットワークって、それは大もとが大きな保険の資本の中でそういう全部、急性期から在宅まで全部を一貫してやってるんですね。そういう仕組みを日本でもつくれと。大学病院は本来別になってたんですけども、大学病院もＮＰＯ法人にして持ち株会社みたいな中に入れろとか、そういう話が今、既に起こっております。私もびっくりして、その話聞いて。それで、いろいろ文科省とかもうちょっと聞いてきたんですが、まだまだ話だけですよという話ですが、こういうものは結構、ある時期から進む可能性があるのではないかと。将来的に多分そういうふうにしないとこの地域の医療もなかなか難しくなる。ですから、超急性期の病院から、はっきり言ってみとりじゃなくて慢性期の、在宅も含めたこういう循環ができるような仕組みをつくらないと、というのは、医療費だけ減らしたら病院は潰れるんです、我々にとっては。だから、そこのところをうまく、国の医療費減らすとかばかりやって全部みとりにしたら、これは大変なことになる。だから、きっちりした医療安全も含めたしっかりしたものをつくっていく上で、やはり大学が中心になってそういうものを、ネットワーク化をやっていくことが必要ではないかなと。

その上で、例えば産科はこれはふやすとかですね、やっていかないと、どうしても産婦人

科やる人は、研究をするには婦人科のほうがいいわけですよね、論文もいっぱい書けるし、産科はいっつも忙しいし。だけど、それをどうやって増やすか、これは今の新しい教授はそういうふうに産科をふやしたいと言っております。これは地域の活性化には絶対必要だろうと。そういう意味で非常に重要ではないかと。

それから、もう一つは定住化、住むというよりもむしろ観光客とか、あるいは何らかの人の出入りですね。とにかく人さえ来てくれれば、人口が減って人がたくさん来てくれる、そういう関連の収入が上がればＧＤＰ上がるわけですね。ですから、そうなれば必ず、この雲南市がなぜ２倍観光客がふえるのか、それでびっくりしてＮＨＫから取材が来て、池上先生が、あっ、そうだったな雲南はとか言われるとまたふえると。だから、やはり住ませるというよりもむしろ来てもらう、循環させる、これを先にやることのほうが大事じゃないかと。いっぱいあるわけですから、ネタとしては。それをもっと取り組んでいく必要があるんではないかと思います。

【関会長】松井先生、そういう中で雲南病院は新しくなるという話なんですが、１０年先の役割もちょっと。

【松井氏】そうですね、今はやはり人口減少に対する対応を一番に私ども苦慮しているとこでございますけども、雲南市の現状を言いますと、６５歳以上の人口が今１万４，０００人ですね。１０年後を調べますと、ほぼ同じ数なんです、１万４，０００人。ただ、高齢化率は３５から４０％強になるのかな。ただ、１０年後も、いわゆる高齢者と言われる方は数が変わらない。つまりは、もう僕も含めて年寄りはいろんな病をたくさん持ってるわけですから、医療の重要性は現在とほぼ同じであろうと。

もう一つは、この地方でも、いわゆる核家族は大変進んでおりますよね。そうすると遠くの病院まで行くのは大変です。だから、むしろ地域の基幹病院としての役割はもっとこの１０年間は大事になってくるかなというふうな考えで新しい病棟の建設に臨んでるとこです。

ただ、今、学長言われたんですけども、２０年後、これを考えたときは、さすがにちょっと対応を今から始めないとまずいかなと。この圏域内、自治体病院３つございますよね。１つは民間病院、この雲南圏域に４つの病院があるんですよ。この４つの病院が本当に今のままでやっていけるかどうか、これ本当に議論しないとまずいんじゃないかなと。特に２０代、３０代の若い医療従事者の方、自分たちの将来を本気で、これからのこの圏域の医療のあり方の議論を始めないと２０年後には対応はできないかなと。向こう１０年は大丈夫。逃げ切って大丈夫かなと、もうそのころ死ぬかもわかりませんけども。ただ、その先は非常に厳しい状況にあるという現実があると思うんですね。

ただですよ、そういったセーフティーネットをつくるっていうのは、これ病院だけじゃできませんよね。当然、行政の支援がないとできませんし、人材、特に医者なんちゅうのはこれは大学からの支援がないとできませんので、ぜひともそういった行政とか大学の支援を受けて、２０年後を見据えた医療環境を今から整備することの議論を始めていただきたいというのが、今、私が考えてる一番重要なポイントでございます。

【速水氏】今、そうした医療環境、もう少し見直ししなきゃいけないということがありました。私もそのとおりだと思いますけども、その医療環境を今集約したとしても、さっき話ししましたように、１０万人当たりこの地域は１３２人なんですね、医師の数が。島根県全体は２７５です。全国が２３８です。だから半分にも行ってないです。だから、この雲南圏域全体でも医師の数は決定的に不足してる。だから中核病院としての機能を果たすために、今、常勤医１８名では、本当に伸び切ったパンツのひものようにいつかぷつんと切れてしまいかねない、そうなってはならないわけで、だから、今、学長がおっしゃったように、今より倍にしたらどうなのか、ピークのときが３４人ですから、ほぼ倍にしてもピークのときと変わらないですけども、しかし、そこまではいかないにしても適正な医師の配置ですね、これは本当に私どもも声を大にして言わなきゃいけないし、努力もしなきゃいけないし、それからまた、県においてもそうした視点をしっかり持っていただきたいというふうに思います。

【原氏】県のほうにもそういう視点をとおっしゃったので一言言わせてもらいますと、今おっしゃった医師の数というのは、あくまでも供給側の数字ですよね。したがって、それだけのニーズがあるかどうかというのはちゃんと片方では見てないといけないと思うんです。

あと、それから二次医療圏、今、雲南圏域という二次医療圏で考えてますけど、果たして、この二次医療圏というものを構成する人口として、この雲南圏域の人口というのが本当にほかの圏域と対等に比較でき得る人口かどうか、この辺をよく考えていただかないと、数だけ増やすとなると、さっき学長がおっしゃったように、本当に病院の経営的な部分でこれから２０年先、本当にやっていけるかどうか、これ非常に心配なところも出てきますので、そこは本当に新しい病院をつくられるんであるならば、なおさら長い視点も持って考えていただくことが重要じゃないかなと思っております。ですので、そこのところはしっかり分析して、ただ、今この現状では、確かに病院が必要とされる医師の数にはまだ充足してないという実態があろうかと思いますが、その状況がずっと続くかどうかはちょっとわからない。

私が思っている雲南の特徴としては、やはり非常に在宅医療の部分が弱いんじゃないかなと思ってます。ですから、逆に言ったら病院とあと老人ホームですね、特養とか、そういった施設としての受け皿、こういったところはある意味では県の中でも相当高い位置にあるんですが、在宅医療、例えばそれを一つの象徴的にあらわしてる訪問看護ステーションの常勤看護職員の数というようなことで見ると、雲南圏域というのは島根県の最低の水準なんですね。ですので、これから考えていくときには、そういった地域包括ケア、あるいは在宅医療、そういうところを推進していくに当たってのそこの受け皿的な部分が今、雲南圏域どうなってるかということをしっかり押さえていく必要がある。そこを押さえて、あと、それでもって今度は、病院を今後、二次圏域の中核病院としてどこまでの機能を持つか、おそらく私は二次医療圏で雲南が完結型にはならないんじゃないかな。地域完結型に今、病院完結型から地域完結型というふうにいわれてますけど、雲南とか大田圏域というのはおそらく地域完結型も無理。やはり地域連携型で、例えば雲南だったら松江、出雲、こういった圏域と一つ連携する形で考えていかないと、余計な投資で後に負担が残るということになりかねないというところを若干心配するものですから、言わせてもらいました。

【松井氏】おっしゃるとおりでございまして、平成２２年、私がちょうど院長になったときに、もうこの数ではとてもじゃないけど全部無理だろうということで、いわゆる昔は４大疾病５事業ですか、やはり４大疾病の部分で、高度なものはもう三次病院にお願いしようと。で、私どもはその５事業の部分ですね、僻地医療とか救急医療、これを中心にやろうということでもう方針を決めてまして、そうしないとまずやれないわけですから。ただそれでも、先ほど市長も言いましたけども、私どもの病院、県内で一番病床利用率高いんですよね、９０％近い。それだけニーズがあるんですよ。そんな中で、これ今、病床削減できないんですよね。ですから、ただ将来的にそういった人数が減ったときの対応策は頭の中にあります。これを介護病床にかえようとか、人材を訪問に出そうとかという考えは持っておりますけども、現状の数の中ではなかなかできないということと、もう一つお願いしたいのは、介護の問題でも、これ希望を持っておる子はいっぱいいるんですけども、いわゆる財政的な問題ですよね、給料が安いとか。その財政的な誘導がないと、これは人間というのは動かないんですよ。そこのところを行政の方々も十分に考えていただきたいというふうに思います。

【速水氏】今、言われたとおりなんですけど、今のまさに新しい病院を建てかえようとするときに、じゃあ、病床数どうするだというようなとこ、いや、病床数をどうしようかというようなことも含めて、今後の雲南医療圏域の中核病院としての果たすべき役割というものを根底から考えて、じゃあ、こういう姿の雲南市立病院にしようということで吟味に吟味を重ねて、今度の新しい病院像というものがはじき出されてそれに向かっておる。

それから、それに加えて今の新しい介護保険事業が始まります。それで地域包括ケアいうものは本当にやっていかなきゃいけません。雲南市には福祉特養施設だけですけども、待機児童者数が約５５０人ぐらい。雲南地域一体ですと７２０名ぐらいです、ダブりなしで。そういったことも考えて、じゃあ、医療の拠点としての雲南市立病院が果たす役割がどうだということから今の計画がありますので、お忘れないように。

【原氏】私が一番心配したのは、大田と雲南が新しい病院を建てかえられると、それはおそらく随分前から、おっしゃったように、いろいろな視点からの検討を重ねてこられた結果だろうとは思っています。ですから、その結論に対しては尊重しますが、心配するのは、こうして国の動きが２０２５年、皆さんも御承知のように、団塊の世代の方々が７５歳以上になる一つの節目の年ですね。２０２５年に向けて、これからの各病院、病棟ごとにどういう機能を病院が持つのか、これを考えていかないといけない。この地域医療ビジョンというものをつくっていくということが、もう既にこれは法律で明記されてるわけですので考えていく必要があるんですが、そこに出てくる２０２５年の雲南圏域の必要な病床機能、そしてそれに応じたベッド数、これは機能別ですよ、病院全体としてじゃなくて、どういう病院、例えば急性期目指すのか、あるいは慢性期、回復期、いろいろ４つの類型ありますよね、高度急性期、急性期、回復期、慢性期、この４つの類型の病棟ごとですから、それは複数機能を持たれることもいいんですが、どういうようなところの位置づけをメインにしていくのかということも本当考えてもらわないといけないことだと思うんですよ。

確かに、病床稼働率が非常に高いということはあるかもしれませんが、平均在院日数も案外高いんじゃないでしょうかね。そういうのは高度急性期というよりは、どちらかというと回復期とか慢性期の方々の入院もかなり多いんじゃないかなというようにも思えますので、そういうのをしっかり分析もしていただきたいなという思いです。

【松井氏】私どもは、いわゆる高度急性期はやってないですね。一般急性期ですから、１０対１看護の基準におさまる範囲内の在院日数なんですね。ただ、先ほど私ちょっと言いましたけども、部長さん御心配されてますけど、この圏域のこの４つの病院のことをやはり医療セーフティーネットとして、これからどの方向に誘導していただけるのかということですよ。これ僕ら病院の職員だけでこれはできないんですよね。いわゆる政治的な配慮が要ると思うんです。ですから、本当にこの４つの病院をどのような機能分担してどうやっていくのかと、この圏域でですね。そういったものは私ども病院の人間だけじゃできませんので、行政とか大学とか、そういった方のいわゆる指導というんですか、そういったことも必要になってくるんじゃないかなというふうに考えております。

【池上氏】いやいや、高度急性期とか、二次医療圏とか三次医療とか四次医療とかわからないことだらけで、何の話をしてるのかが途中でついていけなくなってしまったということがありまして。

つまり、私の解釈ですと、要するに新しい病院を建てかえるんだけども、これからどんどん人口が減ってくる中で、それぞれの病院がどんな役割をするのかってことを明確にしてほしいということですね、要するに。ということを皆さんでもっと話し合ってほしいと、こういうことになるんだろうという理解なんだろうと思うんですが、つまり、要するに、まさに、例えば雲南地区でどうするかっていうときには雲南市の市長さんなり、あるいは雲南の市立病院として考えるんだけども、県の立場としては、ちょっとその近くに別の医療圏もあるんだから、そことのどうしてもっていうことになるというところでの今、いろんなおそらく議論だったんだろうと思うんですね。そのときに、これからの長期的な中で県全体として考える、そして、でもそうは言ったって雲南の市町村にしてみれば、雲南の人たちのことをやはり一番に考えるわけですから、そことの調整ということになってくるんだろうと思うんですね。そのときに、今これからどんどん人口が減ってくる、あるいは病院も患者が減ってくるかもしれないというときに、じゃあ、雲南の将来はどうなんだろうか、２０２５年以降どうなるんだろうかというときに、やはり結局は住みやすいまちづくりという話がありますよね。

そういうときに例えば全国を見ると、全国でも例えば中山間地域でいいますと、非常にかなり田舎のほうに住んでる、あるいはかなり交通の不便な険しいところに高齢者がひとり暮らしをするようになり、それを非常に難しくなってるときにコンパクトシティって概念がありますよね。要するに、ずっと住みなれた場所にいたいのはわかるんだけども、できれば中心部の平野地域におりてきてくださって、そこで歩いて病院に通える、歩いて買い物に行けるようなそういうコンパクトな、つまり人口がどんどん減ってくる、これを何とかとめようっていうお話ですよね。増やすというのが非常に難しい。増やすいろんな段取りをしながら

も、言ってみれば減るスピードを抑えようというときに、今のままの町、昔もっととっても人口が多かったときの町を維持することは絶対無理だっていうときに、あるべきコンパクトシティという、そういうものをどこかで考えていかなければいけないのかな。そのときに、そこなら住みやすいよ、つまり、そこに行くときにも何となく田舎というイメージがあるところがここへ来てみると本当にすてきなわけですよね。

要するに、このあたりだと交通も便利だということがありますし、今日驚いたのは、出雲空港から高速使えば２０分と、出雲市より近いっていう話を先ほど聞きましたね。それこそ東京から来るにしたって、出雲空港使えばあっという間だよっていうこの便をアピールしていく、あるいはコンパクトに、そこにいると全ての生活が調うんだよ。医療だって病院だって、そこに診察に行くのにそんなに時間がかからないんだよっていうことをアピールしていくようなまちづくりという姿、そういう将来像っていうのを考えたり、あるいはアピールしていただくと魅力的になるのかなというふうに思いました。

それと、先ほどみんな専門家はつい専門的な用語ばかりでほかの人にわかりにくいという話が出ました。こんなのは典型的な例なんじゃないかな。つまり、ここで議論しているとっても大事なことなんですけど、聞いてる方が、本当に医療関係者はついていけるんですけど、そうじゃない方はついていけなくなるわけですね。そうすると、結局それで関心が薄れたり、何とかしてくれよになってしまう。つまり、本当にこの医療の専門家でもない人にもわかる言葉でぜひ議論、討論をしていただけるとみんないいんじゃないかなと思います。（拍手）

【速水氏】済みません。今のことについて、本当に会場の皆さん方と認識の一体感を持ちたいために、今、コンパクトシティのお話が出ました。一方、今、本当に国政では、解散はともかく、地方創生が言われておりますけれども、これ何かっていうと、地方が元気にならないと日本が元気にならないよ。そのためには地方に人が住まなきゃいけない。この地域は本当に中心部と周辺部と人の人口密度が違っていて、そこにもってきて、例えばここにコンパクトシティたる拠点をつくったとする、周辺部の人たちがみんなそこへ住んでしまうと、周辺部に住んでて山林や田んぼを守っている人がいなくなる。そうすると荒れるわけですわ。地方創生っていうのは、僕は、この雲南市に住んでいる私としては国土の保全だと思っています。雲南市の面積の８割が山林、平地の多くが農地で山林がほとんど本当に荒れております。これ以上荒れないように、平地の不耕作地がこれ以上増えないように。そのためには、その地域に人が住むことができるようにと、その地域の人が住むことができるようにするためには、じゃあ空き家が余計ある、どうするかということで、そういった状況があっても、ちょっと地域の見方を、地域づくりの見方を変えて、今の、例えば公民館を中心とした地域づくりをやったらどうか、自治会単位じゃなくて、その自治会の集合体単位にまちづくりを考えたらどうかとか、そんな工夫を今凝らしながら雲南市はやろうとしてるわけですが、やはりその地域地域に人が住むことができるような、そして住みながら本当に安心・安全な毎日を送ることができる医療環境が提供できるような、そんなまちづくりが求められていると、ぜひそうした町を実現しなきゃいけないというふうに思っております。

【関会長】ということで、いいですね。少子高齢化社会における医療と教育のあり方なんです。今日ここへ、壇上におるのは恐らく２０年したら８０歳ぐらいになってる人ばかりですから、本当は会場から、１０代の人から２０代の人の意見をもっと聞きたかったんですけど、今日は飛行機が飛んでいますので池上さん帰らないといけないということで、とりあえず時間、４時ということで行いました。

本当、日ごろからここの町のあり方についてどんどん、今日行政のトップであります速水市長も来られておりますし、また病院の側からは松井管理者が来られておりますから、１０年後、２０年後、３０年後、どういうまちづくりをして、どういうふうに医療を考えていくのか、もちろん人手の問題もあるけど、大きなシステムも含めて、また大学でやりますか、大学の教育学部の人とか医学部の人、いろんな学部の人もここのフィールドへ来られるそうですので、ぜひそういう人たちと話し合って、いい雲南をつくっていただけたらというふうに思います。

本日は長時間どうもありがとうございました。先生方、どうもありがとうございました。

展示ブースの様子

終了後の懇親会の様子

第１０回のシンポジウム開催に当りましては、大変多くの団体の皆様にご後援いただきありがとうございました。また、当日ご来賓としてご臨席賜りました皆様にも心より感謝申し上げます。

シンポジウムにつきましては、今後も継続して開催して行きたいと思っておりますので、引き続きご協力いただきますようお願いいたします。

※今回の報告集は、当日の議事録を基に作成させていただきました。

最後に、シンポジウム出演者の皆さんとスタッフ合同での記念撮影